

『日本の童話』全 7 話

日本語・英語対訳絵本

Anthology of 7 Japanese Children's Stories

Japanese English Bilingual Picture Book

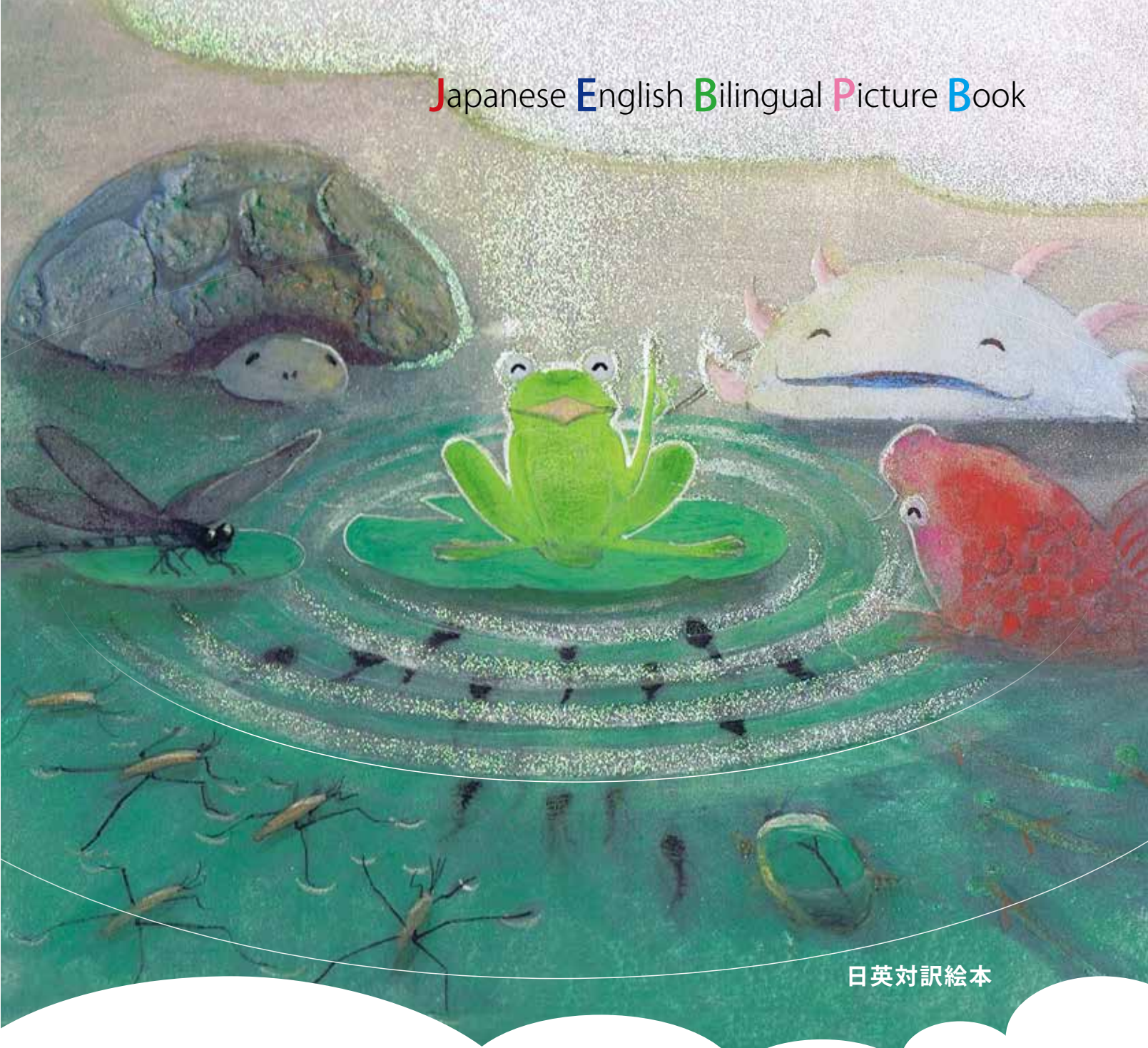
PDF形式 電子書籍版

PDF eBook

2020 年 9 月

地球ことば村・世界言語博物館

The Archives of The World Languages



日英対訳絵本

Anthology of Japanese Children's Stories

にっぽん どうわ
日本の童話

The Archives of The World Languages

English

日本の童話 第7話 日本語・英語対訳絵本
Anthology of Japanese Children's Stories
Japanese English Bilingual Picture Book

	もくじ Index		
	文 Story by	絵 Illustrated by	ページ Page
1 あめ玉 Hard Candy	新美 南吉 Nankichi NIIMI	てりい ゆかどうか Terry YUKADUKA	2
2 おむすびころりん Omusubi kororin - Rolling Rice Balls	三間 由紀子編 Yukiko MIMA	武 美和 Miwa TAKE	6
3 背丈くらべ Comparing Heights	相馬 泰三 Taizo SOMA	武智 祐治 Yuji TAKECHI	14
4 ごんぎつね A Fox Called Gon	新美 南吉 Nankichi NIIMI	えだ いずみ Izumi EDA	18
5 クモの糸 The Spider's Thread	芥川 龍之介 Ryunosuke AKUTAGAWA	吉田 圭一郎 Keiichiro YOSHIDA	36
6 マカフシギ物語 A Mysterious Tale	舟崎 克彦 Yoshihiko FUNAZAKI 三間 由紀子 Yukiko MIMA	舟崎 克彦 Yoshihiko FUNAZAKI	46
7 注文の多い料理店 The Restaurant of Many Orders	宮沢 賢治 Kenji MIYAZAWA	佐々木 ひろこ Hiroko SASAKI	60

表紙デザイン: 吉田 圭一郎・小林 秀夫
Cover Design : KeiichiroYOSHIDA / Hideo KOBAYASHI

1 あめ玉^{だま}

Hard Candy

にいみ なんきち さく
新美 南吉 作
Author : Nankichi NIIMI

てりい ゆかどうか え
Illustrator : Terry YUKADUKA



(1) 春^{はる}の あたたかい 日^ひの こと、わたし舟^{ふね}に 二人^{ふたり}の 小さな 子^こどもを
つ 連れた 女^{おんな}の 旅人^{たびと}が 乗^のりました。
ふね 舟^{ふね}が 出^でようと すると、
「おうい、ちょっと 待^まってくれ。」
5 と、土手^{どて}の 向^むこうから 手^てを ふりながら、さむらいが 一人^{ひとり} 走^{はし}ってきて、
ふね 舟^{ふね}に 飛^とびこみました。

(2) 舟^{ふね}は 出^でました。
さむらいは 舟^{ふね}の 真^まん中に どっかり すわっていました。ぽかぽか あたた
10 かいので、そのうちに いねむりを 始^{はじ}めました。
くろ 黒^{くろ}い ひげを 生^はやして 強^{つよ}そうな さむらいが、こっくりこっくり するの
で、子^こどもたちは おかしくて、ふふふと 笑^{わら}いました。
かあ お母^{かあ}さんは 口^{くち}に 指^{ゆび}を 当^あてて、
「だまっておいで。」
15 と 言^いいました。
さむらいが おこっては 大^{たい}変^{へん}だからです。
子^こどもたちは だまりました。

(3) しばらく すると、一人^{ひとり}の 子^こどもが、
20 「母^{かあ}ちゃん、あめ玉^{だま} ちょうだい。」
と、手^てを 差^さし出^でしました。すると、もう 一人^{ひとり}の 子^こどもも、
「母^{かあ}ちゃん、あたしにも。」
と 言^いいました。

25 (4) お母^{かあ}さんは、ふところから 紙^{かみ}の ふくろを と 取^とり出^だしました。ところが、あ
め玉^{だま}は、もう 一つしか ありませんでした。
「あたしに ちょうだい。」
「あたしに ちょうだい。」

(1) On a warm spring day a woman traveling with two small children boarded a boat.

Just when the boat was about to leave,
“Hey wait!”

5 A samurai came running, waving his hands and jumped on to the boat.

(2) The boat left.

The samurai sat right in the middle of the boat. Since it was so warm, he soon began to doze off.

10 The tough samurai with his black beard looked kind of silly with his head nodding sleepily and the children began to laugh.

Their mother put her finger to her lips.
“Sssshhhh!”

The mother was afraid of the samurai.

15 The children quieted down.

(3) After a while, one of the children said,

“Mom, give me candy.”

and held out a hand. Then the other child said,

20 “Me, too.”

(4) The mother took out her bag and looked inside but there was only one candy left.

“Give it to me!”

25 “Give it to me!”



(5) 二人の子どもは、両方からせがみました。あめ玉は一つしかない
ので、お母さんはこまっしまいました。

「いい子たちだから、待っておいで。向こうへ着いたら、買ってあげるからね。」と
5 と言って聞かせても、子どもたちは、「ちょうだいよう、ちょうだいよう。」
とだだをこねました。

(6) いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり目をあけて、
子どもたちがせがむのを見ていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじゃまされたので、このおさむ
10 らいはおこっているにちがいないと思いました。

「おとなしくしておいで。」と、お母さんは子どもたちをなだめました。
けれど、子どもたちは聞きませんでした。

(7) すると、さむらいがすらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちの
15 前にやって来ました。

お母さんは真っ青になって、子どもたちをかばいました。いねむりのじゃま
をした子どもたちを、さむらいが切ってしまうと思ったのです。

「あめ玉を出せ。」と、さむらいは言いました。

お母さんは、おそろおそろあめ玉を差し出しました。
20

(8) さむらいはそれを舟のへりにのせ、刀でぱちんと二つに
わりました。そして、「そうれ。」と、二人の子どもに分けてやりました。

それから、また元の所に帰って、こっくりこっくりねむりはじめました。



(5) The children were demanding
candy from both sides. Since she only had one candy, she didn't know what to
do.

“Be good and wait. When we reach the other side I will buy more.” But the
5 children just whined, “Give it to me!” “Give it to me!”

(6) The samurai opened his eyes and watched the children beg.

The mother was worried. If they interrupted the samurai's nap he must be
angry, she thought.

10 “Quiet down,” she tried to sooth the children but they wouldn't listen.

(7) The samurai took out his sword and went to the mother and children.

The mother was scared and hid her children. She thought he wanted to cut
the children who had interrupted his nap.

15 “Give me the candy,” the samurai said.

The scared mother gave him the candy.

(8) The samurai placed the candy on the boat and cut it in two with his
sword. He handed one piece to each child.

20 Then he went back to the middle of the boat and his nap.

Translated by Matthew TURKEL

2 おむすびころりん

Omusubi kororin – Rolling Rice Balls

み ま ゆ き こ へん
三間 由紀子 編
Editor : Yukiko MIMA

たけ み わ 絵
武 美和 絵
Illustrator : Miwa TAKE



(1) 昔々 ある ところに、木こりの おじいさんが おばあさんと 仲良く
暮らしていました。

(2) ある 晴れた 日の お昼、おじいさんは いつものように 切り株に 腰
を おろし おばあさんの にぎってくれた おむすびを 食べようと、
竹の 皮の 包みを ひろげた とたん、
おむすびが ひとつ コロコロっと ころがって—
足元の 小さな 穴へ おっこちてしまいました。

(3) 「おやまあ、もったいない ことを した。」と おじいさんが 穴の 中を
のぞきこむと、
「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ころげて 穴の 中」
と、かわいらしい 歌声が 穴の 奥から 聞こえてくるでは ありませんか。

(4) 「これは ふしぎ、誰が 歌っているのだろう。」と、
おじいさんは もう ひとつ おむすびを ころがして、穴に 入れてみました。
「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ころげて 穴の 中」
またまた かわいらしい 歌声が、奥から 聞こえてきます。

(5) 「ははあ、こりゃあ おもしろいぞ。」
おじいさんは、次から 次へ おむすびを ころがして・・・
とうとう、ひとつ 残らず 穴に 落としてしまいました。

(1) Once upon a time, there lived an old woodcutter and his wife. They loved each other very much.

(2) On a sunny day, the old woodcutter sat on his usual stump to have a rice ball that his wife had made him for lunch. When he unwrapped the bamboo leaf, the rice ball fell from his hand and went rolling into a small hole.

(3) "Oh no! What a waste!" The old man looked into the hole and heard a lovely song coming from deep inside,
"A rice ball rolling, rolling,
rolling, rolling into the hole."

(4) "How strange! Who is singing?" he thought.
The old man rolled another rice ball into the hole and again heard a lovely song coming from the hole,
"A rice ball rolling, rolling,
rolling, rolling into the hole."

(5) "What fun!"
The old man rolled rice ball after rice ball into the hole until he had no more left.



(6) 「おかえりなさい おじいさん。あれまあ どうしました そんなに
ひよろひよろ して。」
「おばあさんや、^{はら}腹ぺこだ ^{はら}腹ぺこだ ^{おおはら}大腹ぺこだあ。」

5 (7) おじいさんは ごはんを ^{はら}腹いっぱい ^た食べてから、おばあさんに ^{ひるま}昼間の
ふしぎな ^{うた}歌の ことを ^{はな}話して きかせました。

(8) 「まあまあ、いったい ^{だれ}誰が ^{うた}歌っているのかしらねえ。」

「それさ、それが ^し知りたくてのう。」

10 「それでは、^{あした}明日は ^たたくさん ^たたくさん おむすびを ^も持って ^い行きなされ。
^{なんど}何度も ^{なんど}何度も ^{うたごえ}歌声が ^き聞けるように。」

おばあさんは、お米を ^{こめ}一升 ^{いっしょう}炊きました。

(9) ^{つぎ}次の ^ひ日、^{あさ}朝 ^{はや}早くから ^{やま}山に ^き来た おじいさん、
15 わくわく ^{ひる}しながら ^おお屋に ^{なる}なるのを ^ま待って、
コロリンと おむすびを ^{ころ}ころがして ^{あな}あの ^{あな}穴に ^い入れました。

(10) 「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ^{ころ}ころがて ^{あな}穴の ^{なか}中」



(6) "Welcome home, dear! What happened to you? You look so tired."

"Oh! I am hungry. I am so hungry. I am sooooo hungry!"

(7) The old man ate until he was full then told her about the strange song he
5 heard that afternoon.

(8) "That is so strange. I wonder who is singing?" she asked.

"I really want to find out," he said.

"I will prepare a lot of rice balls for you tomorrow so you can hear them
10 sing over and over again," she said.

The old wife cooked a bushel of rice for her husband.

(9) The next morning, the old woodcutter eagerly went to the forest. When
lunch time finally came he started rolling the rice balls into the hole.

15

(10) "Rice balls rolling, rolling,
rolling, rolling into the hole."



(11) 「ほっほっほ、やっぱり ^{うた}歌が ^き聞こえるわい。なんと まあ ^{きれいな}うたごえ ^{うた}歌声じゃ。いったい ^{だれ}誰が ^{うた}歌っておるか ^し知りたいのう。」
「ああ そうじゃ。わしが ^{じぶん}自分で ^{はい}入ってみれば ^し知れるだろうさ。」

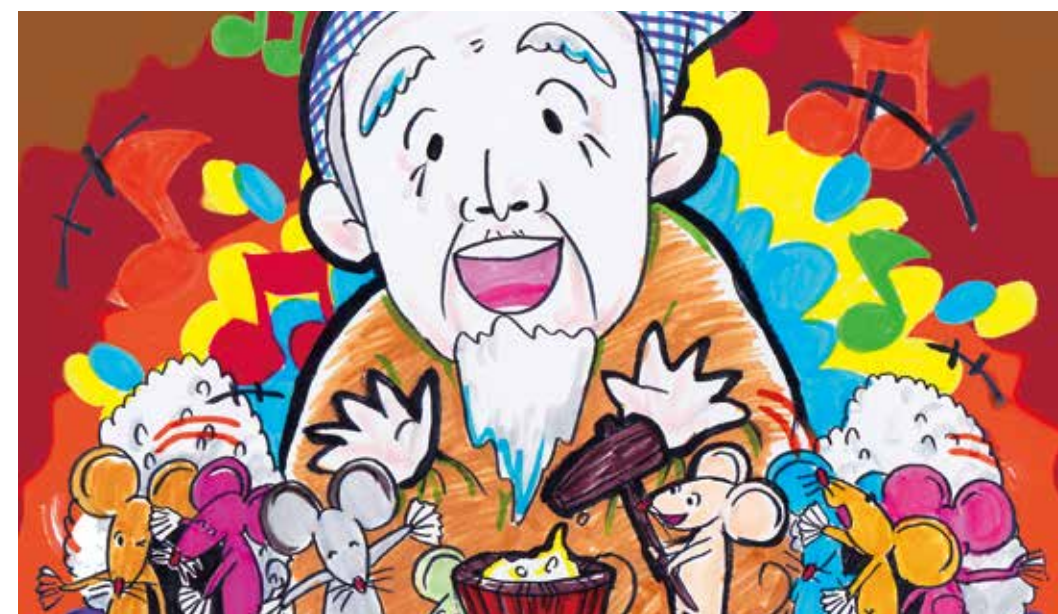
5 (12) おじいさんは ^{りょうて}両手で ^{ひざを}ひざをかかえ、^{せなか}背中を ^{まる}丸く ^{まる}丸く ^{まる}丸めて、おむすびみたいに ^{コロリンと}コロリンと ^{あな}穴の ^{なか}中に ^{ころげて}ころげて ^{はい}入ってみました。
すると、^{あな}穴の ^{そこ}底では ^{おおぜいの}おおぜいの ^{ネズミたちが}ネズミたちが ^{おしくらまんじゅう}おしくらまんじゅう ^{しながら}しながら ^{うた}歌っているでは ^{ありませんか。}ありませんか。

10 「おむすび コロリン コロコロリン、
おじいさんも コロリン コロコロリン」

(13) 「おじいさん、きのうも ^{きょう}今日も ^{たくさん}たくさんのおむすびを ^{ごちそうして}ごちそうして ^{くださって}くださって ^{ありがとう。}ありがとう。お礼に ^{おもちを}おもちを ^{ついて}ついて ^{ごちそうしましょう。}ごちそうしましょう。」

15 (14) ネズミたちは、ちいさな ^{ウスと}ウスと ^{キネを}キネを ^{はこ}運び出して、

「ペッタン ペッタン ペッタンコ
ネズミの ^{おもちだ}おもちだ ペッタンコ
20 やさしい おじいさん ^{めしあがれ}めしあがれ
ネズミの ^{おもちだ}おもちだ ペッタンコ」



(11) "How lucky I am! I can hear the beautiful song again. What lovely voices! I want to find out who is singing... Well, maybe the best way to find the singers is to roll myself into the hole."

5 (12) The old man hugged his knees and bent his back until he was round like a big rice ball. He rolled himself into the hole.

In the hole, he found many mice dancing and singing in a circle.

"Rice balls rolling, rolling, rolling, rolling into the hole,

Old man rolling, rolling, rolling, rolling into the hole"

10

(13) "Thank you for the rice balls. We had lots of food to eat yesterday and today. We will make rice cakes for you in return."

(14) The mice brought out a small mortar and a pestle and pounded rice cake,

15 singing:

"Flat, flat, flat

Mice making rice cakes, flat

For the nice old man to eat

Mice making rice cakes, flat"



(15) おじいさんは、それは それは おいしい おもちを おなかが はちきれそうになるまで ごちそうに になりました。

(16) 「おじいさん、おみやげに これを さしあげましょう。これは 打ち出の小づちです。ほしい ものを となえながら ふれば、なんでも 出てきます。親切に してくださった お礼です。」

(17) おじいさんは 家に もどって おばあさんに 聞きました。
「おばあさんや、お前は 何が ほしいかね。」

(18) 「そうですねえ。ずっと ずっと 昔から ほしかったのは そう 赤ん坊。かわいい 赤ちゃんが いたら、どんなに 幸せでしょうねえ。」

(19) 「ようし、やってみよう。」
おじいさんは 打ち出の小づちを ぶいん ぶいんと 振りしました。
「赤ん坊 出てこい、赤ん坊 出てこい。」
すると、

(20) おばあさんの ひざには、もう おむすびみたいに 丸々 太った かわいい 赤ちゃんが 乗っていました。

(21) おじいさんと おばあさんは 赤ん坊を かわいがりながら、それからも 仲良く 暮らしましたとさ。



(15) The old man ate the delicious rice cakes until his stomach was very full.

(16) "Please accept this present from us," said a mouse. "This is a magic wishing hammer. If you shake this hammer and make a wish, you can get anything you want. This is to thank you for being so kind to us."

(17) When the old man got back home, he asked his wife,
"Is there anything you want to wish for?"

(18) "Hmmm...I always wanted to have a baby. We would be so happy if we had a cute baby."

(19) "Let's try it," the old man said.
He shook the magic wishing hammer with all of his might, and made a wish.
"Let there be a baby! Let there be a baby."
And...

(20) There was a cute baby in the old woman's lap! The baby was as plump and round as a rice ball.

(21) The old couple lived happily ever after and cherished their baby.

Translated by Matthew TURKEL

3 背丈くらべ

Comparing Heights

そうま たいぞう 作
Author : Taizo SOMA

たけち ゆうじ 絵
Illustrator : Yuji TAKECHI



(1) 大昔、—— むろん、人間などと いう せこせこした 動物が、まだ この 世へ 現われない 前の ことです。

ある 日、雲が もうもうと わき起こって、ほうぼうの 山へ おそいかかって 来ました。そして、高さの 順に 一つずつ 下の 方から 埋めて行きました。

5 しだいに 峰の 数が 減って、やがて、最後に、この 雲の 大洪水は、富士山と 八ヶ岳の 頭だけを 残して、あらゆる ものを おぼれさせてしまいました。

(2) そこで、八ヶ岳が 富士山を かえりみて、「とうとう 君と 僕だけに 10 なってしまったね。」と 言葉を かけました。

すると 高慢ちきな 富士山は、

「うん。しかし、そのうちに 僕だけに なってしまうのだ。」と 豪語しました。

こう 言われると、八ヶ岳も だまっている わけには まいりません。

「なんだと！それは こっちで 言う ことだよ。論より 証拠、今に みてい

15 ろ！」

「じゃあ、貴さまは、僕よりも 高いと 思っているのか。」

富士山は、もう なかば けんか腰です。売り言葉に 買い言葉と いう やつ

で、八ヶ岳も 負けては いずに、

「じゃあ、君は、僕よりも 高い つもりで いたのか。」と 同じような こと

20 を 言って、それに 応じました。

「生意気な 奴だ。」と 富士山が 言いました。

(1) It happened a long time ago; long before lousy animals such as humans appeared in this world.

One day, the clouds started gathering and attacked the mountains. One by one, in reverse height order, they were buried from bottom to top.

5 Gradually the number of peaks decreased. Finally only the heads of Mount Fuji and Yatsugatake were left above the great flood of clouds; everything else had drowned.

(2) Yatsugatake looked back at Mount Fuji and said, "It looks like we're the 10 only ones left."

Then arrogant Mount Fuji replied,

"Yeah. But, soon it will only be me."

Yatsugatake could not let that slide,

"What did you say! That should be my line! Prove it!"

15 "What! You think you're taller than me?!"

Mount Fuji was on the warpath. One ill word asks another and Yatsugatake was in no mood to lose.

"Wait, you think you're taller than me?" Yatsugatake responded in kind.

"Who do you think you are?" Mount Fuji said.

4 ごんぎつね

A Fox Called Gon

にいみ なんきち 作
Author: : Nankichi NIIMI
えだ いずみ 絵
Illustrator : Izumi EDA

1

(1) これは、わたしが 小さい ときに、村の 茂平と いう おじいさんから
聞いた お話です。

昔は、わたしたちの 村の 近くの 中山と いう 所に、小さな おしろが

あって、中山様と いう お殿様が おられたそうです。

(2) その 中山から 少し はなれた 山の 中に、「ごんぎつね」と いう
キツネが いました。ごんは、ひとりぼっちの 小ギツネで、しだの いっぱい
しげった 森の 中に、あなを ほって 住んでいました。そして、夜でも 屋で
も、辺りの 村へ 出てきて、いたずらばかり しました。畑へ 入って いもを
ほり 散らしたり、菜種がらの ほしてあるのへ 火を つけたり、百姓家の う
ら手に つるしてある とんがらしを むしり取っていったり、いろんな ことを
しました。

(3) ある 秋の ことでした。二、三日 雨が ふり続いた その 間、ごんは、
外へも 出られなくて、あなの 中に しゃがんでいました。

(4) 雨が あがると、ごんは、ほっとして あなから はい出ました。空は か
らっと 晴れていて、モズの 声が キンキン ひびいていました。



1

(1) This is a story which I heard when I was little. It was told to me by an old
man in my village called Mohei.

A long time ago, in a place near our village called Nakayama, there was a
small castle where the Lord Nakayama lived.

(2) In the mountains a short distance from Nakayama lived Gon the fox. Gon
was a young fox who lived all alone in the hole he had dug for himself in the
fern filled forest. Day and night, he would always go to the nearby villages and
cause mischief. He played all kinds of tricks. He would pull up all the potatoes
in the fields, set fire to the kindling which had been laid out to dry and steal the
red peppers hung up behind the farmers' houses.

(3) One autumn, it kept raining for two or three days straight and Gon had to
stay crouched in his hole because he could not go outside.

(4) When the rain finally stopped, Gon breathed a sigh of relief and crawled
out from his hole. There was a clear, crisp sky and the birds were singing all
around.



(5) ごんは、村の^{むら} 小川の^{おがわ} つつみまで^で 出てきました。あたりの^{あたりの} すすきの
ほには、まだ^{あめ} 雨の^{しずく}が^{ひか} 光っていました。川は、いつもは^{かわ} 水が^{みず} 少ない
のですが、三日もの^{みつ} 雨で、水が^{あめ} どっと^{みず} ましていました。ただの^{ただの} ときは^{みず} 水
につかる^{につかる} ことの^{こと} ない、川べりの^{かわ} すすきや^{すすき} はぎの^{はぎ} かぶが、黄色く^{きいろ} にごっ
5 た^{みず} 水に^{よこ} 横^{よこ}だおしに^{よこ} なって、もまれています。ごんは、川下の^{かわしも} 方へと、ぬか
る^{みち} 道を^{ある} 歩いていきました。

(6) ふと^{ふと} 見ると、川の^み 中に^{みず} 人が^{なか} いて、何か^{ひと} やっています。ごんは、見
つからないように、そうっと^な 草の^{くさ} 深い^{ふか} 所へ^{ところ} 歩きよって、そこから^{ある} じっと
10 のぞいてみました。

(7) 「兵十^{ひょうじゅう}だな。」と、ごんは^{おも} 思いました。兵十^{ひょうじゅう}は、ぼろぼろの^{くろ} 黒い^{きもの} 着物
を^あ まくし上げて、こしの^あ ところまで^{みず} 水に^{さかな} ひたりながら、魚を^{とる} とる はり
きりと^{あみ} いう^{あみ} 網を^{ゆすぶ} ゆすぶっていました。はちまきを^{した} 顔の^{かお} 横^{よこ}ちょう
15 に、円い^{まる} はぎの^は 葉が^{いち} 一まい、大きな^{おお} ほくろみたいに^つ へばり付いていまし
た。

(8) しばらく^{しばらく} すると、兵十^{ひょうじゅう}は、はりきりあみの^{うし} いちばん^{うし} 後ろの^{ふくろ} ふくろ
のように^な なった^な ところを、水の^{みず} 中から^{なか} 持ち上げました。その^{なか} 中には、し
20 ばの^ね 根や、草の^{くさ} 葉や、くさった^は 木切れなどが、ごちゃごちゃ^{はい} 入っていまし
たが、でも、ところどころ、白い^{しろ} 物が^{もの} きらきら^{ひか} 光っています。それは、太い^{ふと}
ウナギの^{おお} はらや、大きな^{おお} キスの^{ひょうじゅう} はらでした。兵十^{ひょうじゅう}は、びくの^{なか} 中へ、その
ウナギや^{くち} キスを、ごみと^{みず} いっしょに^{なか} ぶちこみました。そして、また、ふくろ
の^{くち} 口を^{なか} しばって、水の^い 中へ^い 入れました。



(5) Gon went down to the bank of the small village river. The tops of zebra
grass still sparkled with raindrops. The river was normally shallow, but it was
a lot deeper now after three days of rain. The zebra grass and clover near the
river usually never got wet, but they had been pushed over and lay flat in the
5 muddy water. Gon followed the muddy path downstream.

(6) Gon noticed a person stood in the middle of the river doing something. He
sneakily moved into the tall grass where he hid and watched him.

10 (7) 'It's Hyoju,' Gon thought to himself. Hyoju wore a rolled-up, ragged, black
kimono. He stood in the water up to his waist shaking a net called a *harikiri* for
catching fish. He had a bandana around his head and there was a round clover
leaf stuck to his cheek like a giant mole.

15 (8) After some time, Hyoju lifted the back end of the net, which was shaped
like a bag, out of the water. The bag was full of grass and roots and rotten
pieces of wood, but Gon could see some white things sparkling in there too.
They were the underbellies of fat eels and fish. Hyoju threw the eels and fish
into his basket along with the grass and other rubbish. He then tied the bag
20 closed again and put it back underwater.



(9) ^{ひょうじゅう}兵十は、それから、びくを ^も持って ^{かわ}川から ^あ上がり、びくを ^{どて}土手に ^お置いて、何を ^{なに}さがしにか、^{かわかみ}川上の ^{ほう}方へ ^おかけていきました。

(10) ^{ひょうじゅう}兵十が いなくなると、ごんは、ぴょいと ^{くさ}草の ^{なか}中から ^と飛び出して、
5 ^{びく}びくの ^{そば}そばへ ^{かけ}かけつけました。ちよいと、いたずらが ^{した}したくなったのです。
ごんは、びくの ^{なか}中の ^{さかな}魚を ^{つか}つかみ出しては、はりきりあみの ^かかかっている
^{ところ}所より ^{しもて}下手の ^{かわ}川の ^{なか}中を ^め目がけて、ぽんぽん ^な投げこみました。どの ^{さかな}魚も、
トボンと ^{おと}音を ^た立てながら、にごった ^{みず}水の中へ ^{なか}もぐりこみました。

10 (11) いちばん ^{ふと}しまいに、太い ^{うなぎ}ウナギを ^{つか}つかみに ^かかかりましたが、なに
しろ ^{ぬる}ぬるると ^{すべ}すべりぬけるので、手では ^{つか}つかめません。ごんは、じれった
くなって、^{あたま}頭を ^{びく}びくの ^{なか}中に ^{つつ}つつこんで、ウナギの ^{あたま}頭を ^{くち}口に ^くくわえまし
た。ウナギは、キュッと ^いって、ごんの ^{くび}首に ^ままきつきました。その ^ととたん
に ^{ひょうじゅう}兵十が、^む向こうから、

15 「うわあ、ぬすっとギツネめ。」
と ^どどなり立てました。ごんは、びっくりして ^と飛び^あ上がりました。ウナギを ^ふふ
りすてて ^ににげようと ^ししましたが、ウナギは、ごんの ^{くび}首に ^ままきついたまま
はなれません。ごんは、そのまま ^{よこ}横っ^と飛びに ^と飛び出して、^{いっしょうけんめい}一生懸命 ^ににげてい
きました。

20 (12) ほらあなの ^{ちか}近くの ^{はん}ハンの ^き木の ^{した}下で ^{かえ}ふり返ってみました、^{ひょうじゅう}兵十
は ^お追っかけては ^き来ませんでした。



(9) Hyoju climbed out of the river carrying his basket and put it on the riverbank. He then went running upriver to look for something.

(10) After Hyoju was out of sight, Gon sprang out of the grass and ran over to
5 the basket. He felt like making a little mischief. Gon grabbed the fish out of the
basket and threw them, one by one, downstream of the net. They landed in the
muddy river with a splash.

(11) Finally, Gon tried to catch the fattest eel but it was too slippery to grab by
10 hand. Gon was impatient. He shoved his head into the basket and grabbed the
eel's head in his mouth. The eel fiercely wrapped itself around Gon's neck, and
at that moment Hyoju came back shouting,

'Hey! You thieving fox!'

Gon jumped up in surprise. He tried to shake off the eel but it stayed firmly
15 wrapped around his neck. With eel still attached, Gon leaped to the side and ran
away as fast as he could.

(12) Gon stopped and looked back when he had reached the alder tree near his
hole. Hyoju was not coming after him.



(13) ごんは ほっとして、ウナギの ^{あたま}頭を かみくだき、やっと ^{はず}外して、あなの ^{そと}外の ^{くさ}草の ^は葉の ^{うえ}上に のせておきました。

2

5 (1) ^{とおか}十日ほど たって、ごんが ^{やすけ}弥助と ^{ひやくしやう}いう お百姓の ^{うち}うちの ^{うら}うらを ^{とお}通りかかりますと、その ^{いちじく}イチジクの ^き木の ^{かげ}かげで、^{やすけ}弥助の ^{かない}家内が、^{はぐろ}お歯黒をつけていました。かじ屋の ^や新兵衛の ^{しんべえ}うちの ^{うら}うらを ^{とお}通ると、^{しんべえ}新兵衛の ^{かない}家内が、かみを すいていました。ごんは、「ふふん、村に ^{むら}何か ^{なに}あるんだな。」と思ひました。「なんだろう、^{あきまつ}秋祭りかな。祭りなら、^{まつ}たいこや ^{ふえ}笛の ^{おと}音が ^ししうな ^{もの}ものだ。それに ^{みや}だいいち、お宮に ^たのぼりが ^た立つ ^{はず}はずだが。」

(2) こんな ^{かんが}ことを ^{おもて}考えながら やって来ますと、いつのまにか、^{あか}表に ^{いど}赤い ^{いど}井戸の ^{ある}ある ^{ひやうじゆう}兵十の ^{まえ}うちの ^{まへ}前へ ^き来しました。その ^{ちい}小さな ^{こわれ}こわれかけた ^{いえ}家の ^{なか}中には、^{ひと}おおぜいの ^{あつ}人が ^{あつ}集まっています。よそ行きの ^{きもの}着物を ^き着て、
15 ^てこしに ^{おお}手ぬぐいを ^{なか}さげたりした ^{おんな}女たちが、^{おもて}表の ^{かまど}かまどで ^ひ火を ^{たい}たいています。大きな ^{なか}なべの ^{なか}中では、^な何か ^なぐずぐず にえています。

(3) 「ああ、そうしきだ。」と、ごんは ^{おも}思いました。「^{ひやうじゆう}兵十の ^{うち}うちの ^{だれ}だれが ^し死んだんだろう。」

20

(4) ^{ひる}お昼が ^{むら}すぎると、ごんは、^ぼ村の ^ち墓地へ ^い行って、^{ろくじぞう}六地藏さんの ^{かげ}かげにかくれていました。いい ^{てんき}お天気で、^{とお}遠く ^む向こうには、^やおしろの ^や屋根がわらが ^{ひか}光っています。^ぼ墓地には、^ちひがん花が、^{あか}赤い ^{きれ}きれのように、^{つづ}さき続いています。と、^{むら}村の ^{ほう}方から、カーン、カーンと、^なかねが ^な鳴ってきました。そうしきの ^で出る ^{あいず}合図です。
25

(13) Gon was relieved. He chewed down on the eel's head, and finally managed to unwrap it from his neck and placed it on the grass outside his hole.

5

2

(1) Ten days later, when passing by the back of farmer Yasuke's house, Gon saw Yasuke's wife sat under a fig tree painting her teeth black. When passing behind Shinbei the blacksmith's house, he saw Shinbei's wife
10 combing her hair. 'I see,' thought Gon. 'There must be something going on. Maybe it's an autumn festival. If it's a festival, though, why can't I hear the drums and flutes? There should be flags up at the shrine, too.'

(2) As he wondered about it he kept walking and before long he reached
15 the front of Hyoju's house where there was a red well. Gon could see many people gathered inside the small, ramshackle house. Women wearing their best kimonos, with towels hung at their sides, were making a fire in the stove. The big pot was bubbling noisily as it cooked.

20 (3) 'A-ha! It must be a funeral,' realised Gon. 'I wonder who died in Hyoju's family.'

(4) Later that afternoon, Gon went to the village graveyard and hid behind the six Jizo statues there. It was clear weather and the roof tiles
25 of the castle could be seen sparkling in the distance. Red spider lilies bloomed all around the graveyard like a giant, red cloth. Just then, Gon heard the sound a bell ringing from the village. It was the signal that the funeral was about to start.

(5) やがて、白い 着物を 着た そうれつの 者たちが やって来るのが、
ちらちら 見え始めました。話し声も 近く になりました。そうれつは、墓地へ
入ってきました。人々が 通った あとには、ひがん花が ふみ折られていました。

5 (6) ごんは、のび上がって 見ました。兵十が、白い かみしもを 着けて、
いはいを ささげています。いつもは、赤い さつまいもみたいな 元気の いい
顔が、今日は なんだか しおれていました。
「ははん、死んだのは、兵十の おっかあだ。」ごんは、そう 思いながら 頭
を ひっこめました。

10 (7) その ばん、ごんは、あなの 中で 考えました。「兵十の おっかあは、
ここに ついていて、ウナギが 食べたいと 言ったに ちがいない。それで、兵
十が、はりきり網を 持ち出したんだ。ところが、わしが いたずらを して、ウ
ナギを 取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあに ウナギを 食べさ
15 せる ことが できなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったに ちがいない。
ああ、ウナギが 食べたい、ウナギが 食べたいと 思いながら 死んだんだろう。
ちよっ、あんな いたずらを しなければ よかった。」

3

20 (1) 兵十が 赤い 井戸の ところで 麦を といでいました。
兵十は、今まで おっかあと 二人きりで、まずしい 暮らしを していた も
ので、おっかあが 死んでしまっは、もう ひとりぼっちでした。「おれと 同じ、
ひとりぼっちの 兵十か。」こちらの 物置の 後ろから 見ていた ごんは、そ
う 思いました。

25 (2) ごんは、物置の そばを はなれて、向こうへ 行きかけますと、どこかで、
イワシを 売る 声が します。
「イワシの 安売りだあい。生きの いい、イワシだあい。」

30 (3) ごんは、その いせいの いい 声の する 方へ 走っていきました。と、
弥助の おかみさんが、うら戸口から、
「イワシを おくれ。」
と 言いました。イワシ売りは、イワシの かごを 積んだ 車を 道ばたに お置
いて、ぴかぴか 光る イワシを 両手で つかんで、弥助の うちの 中へ
35 持って 入りました。

(5) Finally Gon began to catch glimpses of the funeral procession,
dressed all in white kimonos, as it came towards the graveyard. The
sound of talking drew closer. The procession entered the graveyard.
Crushed lilies showed where they stepped.

5 (6) Gon stretched his neck to have a look. Hyoju wore a white ceremonial
kimono and held a memorial tablet. Hyoju usually had a bright, happy
face like a red sweet potato, but he looked rather withered today.
‘I see,’ thought Gon, ducking his head down again. ‘It must be his
10 mother who died.’

(7) That evening, Gon sat in his hole thinking. ‘Hyoju’s mother must
have asked for eels when she was sick in bed. That’s why Hyoju went out
with his net. Then I played a trick on him and stole the eel, meaning that
15 Hyoju could not give it to his mother. She must have died without being
able to eat an eel. Oh, she probably died thinking about how much she
wanted to eat a big, fat eel. Oh dear, I should not have played that trick.’

3

20 (1) Hyoju was washing barley at the red well.
Hyoju was poor, but he had always had his mother for company until
now. Now that his mother had died, he was all alone. ‘All alone, just like me,’
thought Gon, who was watching from behind a shed.

25 (2) As Gon was about to leave the shed, he heard the voice of somebody
selling sardines:
‘Get your sardines here! Cheap and fresh! Cheap and fresh sardines!’

(3) Gon started to run towards the sound of that energetic voice. From her
30 backdoor, Yasuke’s wife said,
‘I’ll take some sardines!’
The sardine seller grabbed some shiny sardines in each hand and headed into
Yasuke’s house, leaving his cart full of sardines by the roadside.



- ごんは、その すき間に、かごの なかから 五、六匹きの イワシを つかみ出して、もと 来た 方へ かけだしました。そして、兵十の うちの うら口から、うちの なかへ イワシを 投げこんで、あなへ 向かって かけもどりました。
- とちゅうの 坂の 上で ふり返ってみますと、兵十が まだ、井戸の ところ
5 ろで 麦を といでいるのが 小さく 見えました。
- (4) ごんは、ウナギの つぐないに、まず 一つ、いい ことを したと 思いました。
- 10 (5) 次の 日には、ごんは 山で くりを どっさり 拾って、それを かかえて 兵十の うちへ 行きました。
- (6) うら口から のぞいてみますと、兵十は、昼飯を 食べかけて、茶わんを 持ったまま、ぼんやりと 考えこんでいました。変な ことには、兵十の ほっ
15 ぺたに、かすりきずが ついています。どう したんだろうと、ごんが 思っていますと、兵十が ひとり言を 言いました。
- 「いったい、だれが、イワシなんかを、おれの うちへ ほうりこんでいったん
だろう。おかげで おれは、ぬすびとと 思われて、イワシ屋の やつに ひど
い 目に あわされた。」
20 と、ぶつぶつ 言っています。
- (7) ごんは、これは しまったと 思いました。「かわいそうに 兵十は、イワシ屋に ぶんなぐられて、あんな きずまで つけられたのか。」
- 25 (8) ごんは こう 思いながら、そっと 物置の 方へ 回って、その 入り口に くりを 置いて 帰りました。
- (9) 次の 日も、その 次の 日も、ごんは、くりを 拾っては 兵十の うちへ 持ってきてやりました。その 次の 日には、くりばかりでなく、松たけも 二、
30 三本、持っていきました。



- Gon took the chance to grab five or six sardines and ran back the way he had come. Then, he threw the sardines into Hyoju's house through the backdoor and sprinted back to his hole.
- From the top of a hill on the way back, Gon could see Hyoju in the
5 distance still washing barley by the well.
- (4) Gon thought that he had done his first good deed to make up for taking the eel.
- 10 (5) The next day, Gon gathered a bunch of chestnuts in the mountains and carried them to Hyoju's house.
- (6) He peeked through the backdoor. Hyoju was just starting to eat his lunch and appeared to be lost in thought with a rice bowl in one hand.
15 Strangely enough, there were some scratches on his cheek. As Gon wondered what had happened, Hyoju began to mutter to himself:
- ‘Who went and threw those sardines into my house? The seller thought I had stolen them and beat me up.’
- 20 (7) ‘Oh dear,’ thought Gon. ‘Poor Hyoju. Those scratches must be where the sardine seller hit him.’
- (8) With this thought in his mind, Gon slipped around to the shed and left the chestnuts at the door before heading home.
- 25 (9) The next day and the day after that too, Gon gathered chestnuts and left them at Hyoju's house. The day after that, he left two or three matsutake mushrooms along with the chestnuts.



4
 (1) 月のいい ばんでした。ごんは、ぶらぶら ^{あそ}遊びに ^で出かけました。中山 ^{なかやま}様の ^{さま}おしろの ^{した}下を ^{とお}通って、少し ^{すこ}行くと、細い ^{ほそ}道の ^{みち}向こうから、だれか ^む来るようです。話し ^{はな}声が ^{こえ}聞こえます。チロリン、チロリンと、松虫 ^{まつむし}が ^な鳴いてい
 5 ます。
 (2) ごんは、道の ^{みち}かたがわに ^{かく}かくれて、じっと ^{して}していました。話し ^{はな}声は、
 だんだん ^{ちか}近く ^{ひようじゆう}なりました。それは、兵十 ^{ひょうじゆう}と、加助 ^{かすけ}と ^{ひやくしやう}いう ^お百姓 ^{ひやくしやう}でした。
 「そうそう、なあ、加助。」
 10 と、兵十 ^{ひょうじゆう}が ^い言いました。
 「ああん。」
 「おれあ、このごろ、とても ^{ふしぎ}不思議な ^{こと}が ^あるんだ。」
 「何が。」
 「おっかあが ^し死んでからは、だれだか ^し知らんが、おれに ^{くり}くりや ^{まつ}松たけな
 15 んかを、毎日 ^{まいにち}毎日 ^{まいにち}くれるんだよ。」
 「ふうん。だれが。」
 「それが ^わ分かんのだよ。おれの ^し知らん ^{うち}うちに ^お置いていくんだ。」
 (3) ごんは、二人 ^{ふたり}の後 ^{あと}をつけていきました。
 20 「ほんとかい。」
 「ほんとだとも。うそ ^{おも}思うなら、あした ^み見 ^こに ^来いよ。その ^{くり}くりを ^み見
 せてやるよ。」
 「へえ、変 ^{へん}なこと ^もあるもんだなあ。」
 25 (4) それなり、二人 ^{ふたり}は ^だまって ^{ある}歩いていきました。
 (5) 加助 ^{かすけ}が、ひよいと ^{うし}後ろ ^みを見ました。ごんは ^{ちい}びっくりして、小さく ^ななっ
 て ^た立ち止まりました。加助 ^{かすけ}は、ごんには ^き気が ^{つか}つかないで、そのまま ^ささっ
 と ^{ある}歩きました。吉兵衛 ^{きちべえ}と ^{ひやくしやう}いう ^お百姓 ^{ひやくしやう}の ^{うち}うちまで ^く来ると、二人 ^{ふたり}は ^そそ
 30 へ ^{はい}入っていました。

4

(1) There was a bright moon in the sky that evening and Gon had gone for a stroll. Not long after he had passed by Lord Nakayama's castle on its hill, he heard the sound of people coming towards him along the narrow path. The
 5 crickets were chirping.

(2) Gon hid at the side of the road and sat still, waiting. The sound of people talking slowly drew closer. It was Hyoju and a farmer named Kasuke.

'By the way, Kasuke,' said Hyoju.

10 'Yes?'

'Some strange things have been happening to me recently.'

'Like what?'

'I don't know who, but ever since my mother died somebody has been coming and giving me chestnuts and mushrooms every day.'

15 'Hmm, who could it be?'

'I don't know. They always come and go without me noticing.'

(3) Gon followed the two men.

'Really?'

20 'Really. If you think I'm lying, then come tomorrow and see for yourself. I'll show you the chestnuts.'

'Wow. Strange things really do happen.'

(4) The two continued walking in silence.

25

(5) Kasuke took a sudden look behind him. Gon was surprised and crouched down and stayed still. Kasuke did not notice Gon and continued briskly walking. When the two reached the house of a farmer named Kichibei they both entered.



ポンポンポンと、木魚の音がしています。
 まどのしょうじに明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつって、
 動いていました。ごんは、「お念仏があるんだな。」と、思いながら、井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど人が連れ立っ
 5 て、吉兵衛のうちへ入って行きました。
 おきょうをよ読む声が聞こえてきました。

5
 (1) ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。
 10 兵十と加助は、またいっしょに帰って行きます。ごんは、二人の話を
 聞こうと思っ、ついて行きました。兵十のかげぼうしをふみふみ行
 きました。

(2) おしろの前まで来たとき、加助が言いました。
 15 「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」
 「えっ。」
 と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

(3) 「おれはあれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃ
 20 ない、神様だ。神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思
 わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」
 「そうかなあ。」
 「そうだと。だから、毎日、神様にお礼を言うが、いいよ。」
 「うん。」

25 (4) ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と、思いました。「おれがく
 りや松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、
 神様に お礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」

Gon could hear the beating of a monk's drum coming from inside.

Through the paper screen window, Gon could see the shadow of the monk's large, bald head as it moved in prayer. 'There must be a ceremonial prayer going on,' thought Gon as he crouched by the well. After some time, another
 5 group of three people entered Kichibei's house.
 Gon could hear the monk chanting Buddhist scriptures.

5
 (1) Gon stayed crouched by the well until the ceremonial prayer was finished.
 10 Hyoju and Kasuke came out and headed back together the way they had come. Gon followed them, wanting to listen to their conversation. He followed in Hyoju's shadow, step by step.

(2) As they drew close to the castle, Kasuke suddenly spoke.
 15 'About what you said before... it must be the work of God.'
 'What?'
 replied Hyoju, looking at Kasuke's face in surprise.

(3) 'I have been thinking about it since you first mentioned it. It cannot be the
 20 work of humans. It must be God! God felt sorry for you all alone and has been giving you all those things.'
 'You really think so?'
 'Absolutely. You would do best to thank God every day.'
 'Alright, I will.'

25 (4) Gon was disappointed. 'It's me who brings you the chestnuts and mushrooms,' he thought. 'It is not fair if you thank God without thanking me!'



- 6
 (1) その 明くる 日も、ごんは、くりを 持って、兵十の うちへ 出かけました。兵十は、物置で なわを なっていました。それで、ごんは、うちの うら口から、こっそり 中へ 入りました。
- 5
 (2) その とき 兵十は、ふと 顔を 上げました。と、キツネが うちの 中へ 入ったでは ありませんか。こないだ、ウナギを ぬすみやがった あの ごんぎつねめが、また いたずらを しに 来たな。
 「ようし。」
- 10
 (3) 兵十は 立ち上がって、なやに かけてある 火なわじゅうを 取って、火薬を つめました。そして、足音を しのばせて 近よって、今、戸口を 出ようと する ごんを、ドンと うちました。
- 15 (4) ごんは、ばたりと たおれました。
- (5) 兵十は かけよってきました。うちの 中を 見ると、土間に くりが 固めて 置いてあるのが、目に つきました。
 「おや。」
- 20 と、兵十は びっくりして、ごんに 目を 落としました。
 「ごん、おまえだったのか、いつも、くりを くれたのは。」
- (6) ごんは、ぐったりと 目を つぶった まま、うなずきました。
 兵十は、火なわじゅうを ばたりと 取り落としました。青い けむりが、まだ つつ口から 細く 出ていました。



- 6
 (1) The next day, Gon took more chestnuts to Hyoju's house. Hyoju was in the shed making rope so Gon snuck into the house through the backdoor.
- 5 (2) At that moment Hyoju just happened to look up. And what did he see but a fox sneaking into his house! 'That must be Gon who stole my eel the other day. I bet he's back to make more mischief,' he thought.
 'I won't let him get away this time!'
- 10 (3) Hyoju stood up, grabbed his gun from the wall of the shed and put in the gunpowder. He moved closer to Gon, careful not to make any noise. Bang! He shot Gon just as he was about to leave through the door.
- (4) Gon fell down with a thud.
- 15 (5) Hyoju ran over to him. It was then that he noticed the neat pile of chestnuts on the floor.
 'What's this?'
 Hyoju was surprised. His eyes fell upon Gon.
- 20 'Gon! It was you all this time, bringing me the chestnuts.'
- (6) Gon nodded with his heavy eyes still shut. Hyoju let the gun fall out of his hands with a clatter. A thin stream of blue smoke was still coming from the barrel.

Translated by Ash SPREADBURY

いと
5 クモの糸

The Spider's Thread

あくたがわ りゅうのすけ
芥川龍之介 作

Author : Ryunosuke AKUTAGAWA

よしだ けいいちろう
吉田 圭一郎 絵

Illustrator : Keiichiro YOSHIDA

1

(1) ある 日の ことで ございます。お釈迦様は 極楽の 蓮池の ふちを、
ひとりで ぶらぶら お歩きに なっていらっしゃいました。

池の 中に 咲いている 蓮の 花は、みんな 玉のように まっ白で その

5 まん中に ある 金色の ずいからは、なんとも いえない よい 匂いが たえ
間なく あたりへ あふれております。極楽は ちょうど 朝なので ございま
しょう。

(2) やがて お釈迦様は その 池の ふちに おたたずみに なって、水の
10 面を おおっている 蓮の 葉の 間から、ふと 下の 様子を ご覧に なりま
した。

この 極楽の 蓮池の 下は、ちょうど 地獄の 底に あたっておりますから、
水晶のような 水を すき通して、三途の 川や 針の 山の 景色が、ちょう
ど のぞき眼鏡を 見るように、はっきりと 見えるので ございます。

15

(3) すると その 地獄の 底に、犍陀多と いう 男が 一人、他の 罪人と
一緒に うごめいている 姿が、お目に とまりました。

この 犍陀多と いう 男は、人を 殺したり 家に 火を つけたり、いろい
ろ 悪事を はたらいた 大どろぼうで ございますが、それでも たった一つ、
20 よい ことを いたした 覚えが ございます。

と 申しますのは、ある 時 この 男が 深い 林の 中を 通りますと、小
さな クモが 一匹、道ばたを はっていくのが 見えました。そこで 犍陀多
は 早速 足を 上げて、踏み殺そうと いたしましたが、「いや、いや、これも
小さいながら、命の ある ものに ちがいない。その 命を むやみに とると

25 いう ことは、いくら なんでも かわいそうだ。」と、こう 急に 思い返して、
とうとう その クモを 殺さずに 助けてやったからで ございます。



1

(1) One day, Buddha was taking a stroll, all alone, around the lotus pond in
Heaven.

The lotus flowers blooming on the pond were all pure white like pearls and
5 constantly gave off an indescribably delightful smell from the golden stamens
in their centres. It must be morning in Heaven.

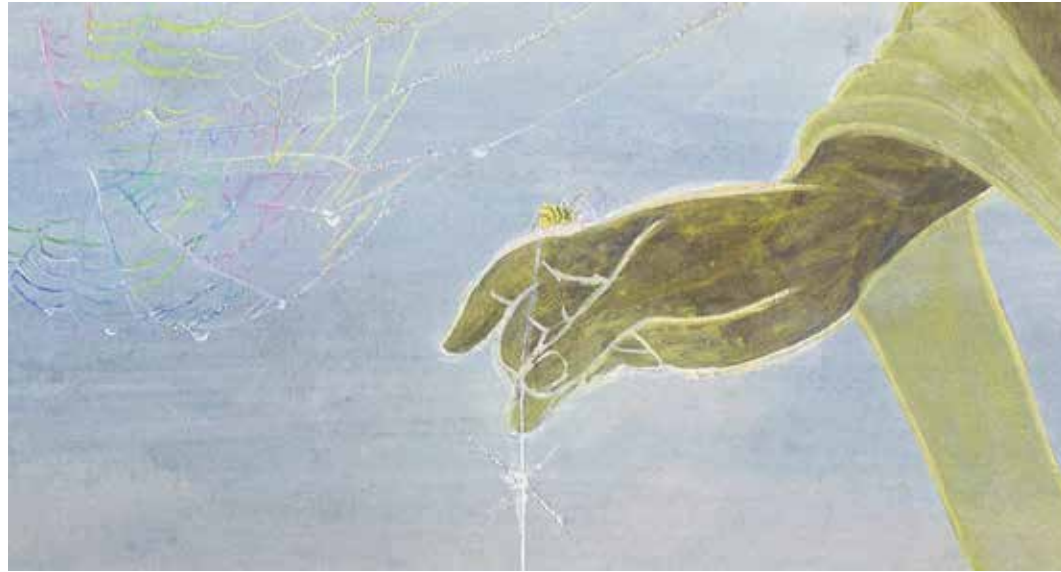
(2) Finally, Buddha came to a halt by the edge of the pond and looked down
through the gaps between the lotus leaves.

10 The very bottom of Hell was located directly under this lotus pond in
Heaven, so Buddha was able to look down through the crystal-like water as if
using goggles and clearly see the River of Three Crossings and the Mountain
of Needles.

15 (3) It was then that Buddha noticed a man named Kandata writhing with the
other sinners at the bottom of Hell.

Kandata was a wicked thief who had done many evil deeds, including killing
people and setting houses on fire. He did, however, do one good deed in his
life.

20 One time he had come across a small spider crawling along the edge of the
road. He had picked up his foot ready to squash the thing, but then suddenly
reconsidered. 'No, no. It may be small, but a life is a life. It would be cruel of
me to take that life without reason,' he had thought, and decided to help the
spider instead of killing it.



(4) お釈迦様は 地獄の 様子を ご覧に なりながら、この 犍陀多には クモを 助けた ことが あるのを お思い出しに なりました。

そう して それだけの よい ことを した 報いには、できるなら、この 男を 地獄から 救い出してやろうと お考えに なりました。

5 幸い、そばを みますと、翡翠のような 色を した 蓮の 葉の 上に、極楽の クモが 一匹、美しい 銀色の 糸を かけております。

お釈迦様は その クモの 糸を そっと お手に お取りに なって、玉の ような 白蓮の 間から はるか 下に ある 地獄の 底へ、まっすぐに それを お下ろしなさいました。

10

2

(1) こちらは 地獄の 底の 血の 池で、他の 罪人と 一緒に、浮いたり 沈んだり していた 犍陀多で ございます。なにしろ どちらを 見ても、まっ暗で、たまに その 暗闇から ぼんやり 浮き上がっている ものが あると 思いますと、それは 恐ろしい 針の 山の 針が 光るので ございますから、その 心細さと いったら ございません。その うえ あたりは 墓の 中のように しんと 静まり返って、たまに 聞こえる ものと いうては、ただ 罪人が つく かすかな ため息ばかりで ございます。

これは ここへ 落ちてくる ほどの 人間は、もう さまざまな 地獄の 責め苦に 疲れはてて、泣き声を 出す 力さえ なくなっているので ございましょう。ですから さすが 大どろぼうの 犍陀多も、やはり 血の 池の 血に むせびながら、まるで 死にかかった 蛙のように、ただ もがいてばかり おります。



(4) Buddha remembered all of this as he looked down into Hell.

He decided that since Kandata had done such a good thing he would save him from Hell.

Looking around him, Buddha was lucky enough to find a spider of Heaven
5 spinning a beautiful silver thread atop one of the jade coloured lotus leaves.

Buddha picked up the thread gently in his fingers and fed it straight down between the pearl-white lotuses to the bottom of Hell.

10 2

(1) Here at the bottom of Hell, Kandata was bobbing and sinking in the Lake of Blood with the other sinners. Occasionally he would notice something standing out in the darkness only to realise that it was the glinting of the ferocious needles of the Mountain of Needles. How hopeless it all felt to him.
15 On top of that, his surroundings were as quiet as a grave, the silence only occasionally broken by the faint sighs of the sinners.

Those who reach the bottom of Hell are already worn out from Hell's various tortures and no longer have the energy even to cry. And so even the wicked thief Kandata simply wriggled around like a dying frog as he choked in
20 the Lake of Blood.



(2) ところが ある 時の ことで ございます。なにげなく 韃陀多が 頭を
あ 上げて、血の 池の 空を 眺めると、その ひっそりと した 闇の 中を、
とお とお てんじょう ぎんいろ ひとめ おそ
遠い 遠い 天上から、銀色の クモの 糸が、まるで 人目に かかるのを 恐
れるように、一筋 細く 光りながら、するすると 自分の 上へ たれてまいる
5 では ございせんか。韃陀多は これを 見ると、思わず 手を 打って 喜び
ました。

この 糸に すがりついて、どこまでも 上っていけば、きっと 地獄から ぬ
け出せるのに 相違 ございせん。

いや、うまく いくと、極楽へ 入る ことさえも できましよう。そう すれば、
10 もう 針の 山へ 追い上げられる ことも なくなれば、血の 池に、沈められ
る ことも あるはずは ございせん。

(3) こう 思いましたから 韃陀多は、早速 その クモの 糸を 両手で
しっかりと つかみながら、一生懸命に 上へ 上へと たぐり 上り始めました。
15 もとより 大どろぼうの ことで ございますから、こう いう ことには 昔か
ら、なれきっているの で ございます。

しかし 地獄と 極楽との 間は、何万里と なく ございますから、いくら
あせってみた ところで、容易に 上へは 出られません。

やや しばらく 上る うちに、とうとう 韃陀多も くたびれて、もう 一た
20 ぐりも 上の 方へは 上れなくなっていました。

そこで 仕方が ございせんから、まず 一休み 休む つもりで、糸の
中途に ぶら下がりながら、はるかに 目の 下を 見下ろしました。



(2) However, one day, Kandata happened to look up from the Lake of Blood
and what should he see but a silver spider's thread coming down through
the silent darkness from the roof far, far above. It was a single, thin, shining
thread which appeared as if it was trying to avoid notice as it smoothly came
5 down to rest above his head. Upon seeing this, Kandata could not help but
clap his hands in joy.

If he just grabbed this thread and kept climbing, surely he would be able to
escape from Hell.

In fact, if he was lucky, he might even be able to reach Heaven! Then he
10 would never again be chased into the Mountain of Needles or drowned in the
Lake of Blood.

(3) This thought is what made Kandata quickly and firmly grab the thread
with both hands and start desperately dragging himself up and up. Having
15 once been a thief, Kandata was used to climbing ropes.

However, there were thousands of miles of darkness between Hell and
Heaven, so it was not an easy climb. Kandata became worn out after climbing
for some time and was not able to pull himself even one tug further. There
was nothing to be done so he decided to take a rest. Hanging from the thread,
20 he looked down into the depths below.



(4) すると、一生懸命に 上った かいが あって、さっきまで 自分が いた
 血の 池は、今では もう 闇の 底に いつの 間にか 隠れております。それ
 から あの ぼんやり 光っている 恐ろしい 針の 山も、足の 下になっ
 てしまいました。

5 この ぶんで 上っていけば、地獄から 抜け出すのも、存外 わけが ないか
 も しれません。犍陀多は 両手を クモの 糸に からみながら、ここへ 来て
 から 何年にも 出した ことの ない 声で、「しめた。しめた。」と 笑いました。
 ところが ふと 気が つきますと、クモの 糸の 下の方には、数かぎりも
 ない 罪人たちが、自分の 上った 後を つけて、まるで アリの 行列のよう
 10 に、やはり 上へ 上へ 一心に よじ上ってくるでは ございませんか。
 犍陀多は これを 見ると、驚いたのと 恐ろしいのとで、しばらくは ただ、
 おお 大きな 口を 開いたまま、目ばかり 動かしておりました。
 自分 一人でさえ 切れそうな、この 細い クモの 糸が、どうして あれだ
 けの 人数の 重みに たえる ことが できましょう。

15 もし、万一 途中で 切れたと いたしましたら、せっかく ここまで 上って
 きた この かんじんな 自分までも、もとの 地獄へ 逆落としに 落ちてしま
 わなければなりません。そんな ことが あったら、大変で ございます。

が、そう いう うちにも、罪人たちは 何百と なく 何千と なく、まっ暗
 な 血の 池の 底から、うようよと はい上がって、細く 光っている クモの
 20 糸を、一列に なりながら、せっせと 上ってまいります。

今の うちに どうか しなければ、糸は まん中から 二つに 切れて、落ち
 てしまうのに ちがい ありません。

そこで 犍陀多は 大きな 声を出して、「こら、罪人ども。この クモの
 糸は 俺の ものだぞ。おまえたちは いったい 誰に 聞いて、上ってきた。下
 25 りろ。下りろ。」と わめきました。



(4) His efforts climbing must have paid off because the Lake of Blood where
 he had been not long ago was now lost in the darkness below. The dully
 glinting Mountain of Needles was beneath him now, too.

At this rate, it might not be so difficult to escape from Hell after all. Kandata
 5 wrapped both his hands firmly around the spider's thread and, for the first
 time in who knows how many years since coming to Hell, laughed to himself and
 shouted, 'I've done it! I've done it!'

It was then that he realised that an endless line of sinners was climbing up
 the spider's thread after him like a line of ants.

10 Kandata was so surprised and scared at this sight that for some time all he
 could do was stare with his mouth wide open.

The spider's thread looked thin enough to break from his weight alone. How
 could it possibly bear the weight of this many people?

If the thread were to break now then even Kandata, who had climbed so far,
 15 would be dropped straight back down into Hell. He could not let that happen.

However, even as he thought this, hundreds and thousands of sinners
 continued quickly climbing up from the dark Lake of Blood below.

If Kandata did not do something now, the thread would surely break in the
 middle and he would fall back down.

20 'Hey! You sinners!' Kantada shouted loudly. 'This spider's thread is mine!
 Who said you could all come up? Get down! Get down!'



(5) その とたんで ございます。今まで なんとも なかった クモの 糸が、
急に 犍陀多の ぶら下がっている 所から、ぶつりと 音を たてて 切れまし
た。

ですから 犍陀多も たまりません。あっと いう まも なく 風を 切って、
5 こまのように くるくると 回りながら、みるみる うちに 闇の 底へ、まっ逆
さまに 落ちてしまいました。

あとには ただ 極楽の クモの 糸が、きらきらと 細く 光りながら、月も
ほし 星も ない 空の 中途に、短く たれているばかりで ございます。

10 3

(1) お釈迦様は 極楽の 蓮池の 縁に 立って、この 一部始終を じっと
見ていらっしゃいましたが、やがて 犍陀多が 血の 池の 底へ 石のように
沈んでしまいますと、悲しそうな お顔を なさりながら、また ぶらぶら お歩
きに なり始めました。自分ばかり 地獄から 抜け出そうと する、犍陀多の
15 無慈悲な 心が、そう して その 心 相当な 罰を 受けて、もとの 地獄へ
落ちてしまったのが、お釈迦様の お目から 見ると、あさましく おぼしめされ
たので ございましょう。

(2) しかし、極楽の 蓮池の 蓮は、少しも そんな ことには 頓着いたしま
20 せん。その 玉のような 白い 花は、お釈迦さまの おみ足の 回りに、ゆらゆ
ら うてなを 動かして、その まん中に ある 金色の ずいからは、なんとも
いえない よい 匂いが 絶え間 なく 辺りへ あふれております。極楽も も
う 昼に 近くなったので ございましょう。



(5) It was then that the spider's thread, which until that point had shown no
signs of breaking, chose to snap just above where Kandata was hanging.

There was nothing he could do and he fell head first, spinning like a
spinning top, back down into the darkness.

5 All that was left was the thin thread of the spider from Heaven, broken and
short now, shining in the moonless sky.

3

(1) Buddha stood still at the edge of the lotus pond in Heaven, watching
10 everything that happened below. Eventually, as Kandata sank like a rock into
the Lake of Blood, Buddha began his stroll again with a sad look on his face.
Buddha must have felt much pity for Kandata. He had only cared about saving
himself, and that selfish and merciless heart of his had doomed him to fall
back into Hell.

15

(2) However, the lotuses of the pond in Heaven knew nothing of this. Their
pearl-white flowers swayed around Buddha's feet as he walked, and they filled
the air with the same indescribably delightful scent. It must be nearly noon in
Heaven.

Translated by Ash SPREADBURY

6 マカフシギ物語^{ものがたり}

A Mysterious Tale

ふなざき よしひこ み ま ゆ き こ
舟崎 克彦・三間 由紀子 作
Authors : Yoshihiko FUNAZAKI / Yukiko MIMA

ふなざき よしひこ
舟崎 克彦 絵
Illustrator : Yoshihiko FUNAZAKI

ノベヤマさんは^{うちゅうひこうし}宇宙飛行士です。
その^{よる}夜、ノベヤマさんは^{こうど}高度^{にまん}二万キロメートルの^{そら}空の^{かなた}かなたから、
^{ちきゅう}地球に^むむけて^{カメラ}カメラを^{セット}セットしていました。
なんでも^ひその^{りゅうせい}日は、流星の^{あめ}雨が^{たくさん}たくさん^{ふる}ふる、と^{いう}いうのです。
その^{ようす}ようすを、さつえいするのが、ノベヤマさんの^{しごと}しごとでした。

(1) ^{なが}けれど、流れ星は、いっこうに^{あら}あられませんか。
ノベヤマさんは^{ねむ}ねむ気ざましに、あじけない^{うちゅう}宇宙ラーメンを^{すす}すすりました。
その^{とき}とき、^{うちゅうせん}宇宙船の^{すぐ}すぐ^{わき}わきを、まぶしい^{ひかり}光の^{おび}おびが、すりぬけていっ
たのです。
ノベヤマさんは、ラーメンの^{カップ}カップを^{ほうり}ほうりだすと、あわてて^{ビデオ}ビデオカメ
ラの^{スイッチ}スイッチを^おおしました。
^{ひかり}光は、はるか^{かなた}かなたで^{ぐろ}どす黒い^{スモッグ}スモッグに^{つつ}つつまれた^{ちきゅう}地球^{めざ}めざして、
いっさんに^と飛びさりました。

(2) ^{ほし}星の^{あめ}雨が^{あと}あとに^{つづく}つづくかと、まちかまえていますと、それきり。あたり
は^{ふかい}ふかい^{やみ}やみに^{もど}もどります。
「なんだ、^{いっこ}一個きりか…。」
ノベヤマさんは^ががっかりして、^{うちゅうゆうえい}宇宙遊泳している^{ラーメン}ラーメンを^{つか}つかまえました。
「それにしても、どでかい^{なが}流れ星^{ぼし}だったなあ…。」

(3) ^ビビ、^ビビ、^ビビ、^ビビ…。
モニターテレビが^な鳴って、さっき^{さつえい}さつえいした、^{なが}流れ星の^{えいぞう}映像を^{さいせい}再生し
ます。ノベヤマさんは、たべのこしの^{ラーメン}ラーメンの^{スープ}スープを^{ストロー}ストローで^飲飲
みながら、それに^め目を^{やった}やったとたん、また、^{カップ}カップを^{ほうり}ほうりだす^{はめ}はめにな
りました。そこに^ううつっていたのは、^{ほし}星かと^{おも}思いきや、^{いちわ}一羽の、^み見たことも
ない^{とり}鳥の^{すがた}すがただったのです。



Mr Nobeyama was an astronaut.

One evening, from the high altitude of 20,000 kilometres, he was busy setting his camera to point towards Earth.

There was going to be a meteor shower and it was Mr Nobeyama's job to film it.

(1) However, the meteor shower simply would not come.

Mr Nobeyama slurped his bland astronaut's ramen noodles in order to stay awake.

At that moment, a bright flash of light whizzed right by his spaceship.

Mr Nobeyama threw his ramen noodles into the air and hurried to press the switch on the video camera.

The flash of light was headed straight for the far away Earth which was covered in thick, black smog.

(2) Mr Nobeyama thought that the meteor shower would follow, but there were no more flashes of light.

He was once again surrounded by deep darkness.

'What? Just one...?'

Mr Nobeyama was disappointed. He grabbed the cup of ramen noodles which was floating in mid-air.

'Still, that was a really big meteor!' he thought.

(3) Beep, beep, beep, beep...

The spaceship's monitor displayed the image of the meteor which had just been taken. Upon seeing the image, Mr Nobeyama, who was drinking the remaining ramen soup through a straw, once again threw the cup in the air in surprise. What was shown on the monitor was no meteor. It was a single bird, the like of which he had never seen before.



(4) 黄金の鳥でした。

「そんな バカな…。いくら なんでも、こんな 宇宙空間を 鳥が 飛ぶなんて…」

ノベヤマさんは 頭を ぶるぶるっと ふると、その 画像を さっそく 地球の 基地に 送りました。

「これは グリニッチ 標準時 0430に そちらへ むかった 流れ星です。正体を 確認してください。」

(5) ノベヤマさんが ラーメンを やっと 食べ終わった ころ、地上から 返事が きました。

「その 流れ星は 地球からは 観測できませんでした。きっと 軌道を はずれたのでしょう。」

「では、光の 中に うつつていた 鳥の すがたは、どう はんだんしますか？」

ノベヤマさんが たずねますと、

15 「なにも うつつとらん。」そっけない 答えが かえってきました。

(6) 「まさか…。」

ノベヤマさんは、もう 一度 テープを まきもどして、さっきの 流れ星を モニターに うつしました。すると、どう いう ことでしょう、さっきは たし

20 かに うつつていた 鳥の すがたが、かげも かたちも ないのです。

(気の せいだろうか … いや … しかし … そうだったのかも しれない。)



(4) It was a golden bird.

‘This is ridiculous,’ thought Mr Nobeyama. ‘There’s no way that a bird could fly in space…’

He shook his head vigorously and quickly sent the image to Headquarters on Earth.

5 ‘This image is of a meteor headed for Earth at 0430 GMT. Please identify it for me.’

(5) Just as Mr Nobeyama finally finished his ramen noodles, the reply came from Earth.

‘We did not detect that meteor from Earth. It must have been flying off its expected path.’

10 ‘And what do you make of the bird which can be seen in the light?’ asked Mr Nobeyama.

‘There’s nothing there,’ came the blunt reply.

(6) ‘That’s not possible…’

15 Mr Nobeyama rewound the tape and displayed the meteor on the monitor. To his utmost surprise, there was nothing left of the bird which had surely been there moments ago.

‘Was it just my imagination? No… but… maybe it was…’

20



(7) 流星雨は なかなか あらわれません。
 ノベヤマさんは、もうれつに ねむくなってきました。
 「ちょっと 休もう…。」
 だれかに しごとを たのもうにも、その 宇宙船には、ノベヤマさん ひとり
 しか 乗っていなかったのです。
 ノベヤマさんは カメラを 自動に 切りかえると、かたわらの ベッドに 横
 に なりました。

(8) なんて こちよい ねむりだった ことでしょう。宇宙飛行士とも なる
 と、かぞえきれないほどの 機械を、四六時中 あつかっていなくては なりませ
 せん。とても くたびれるのです。
 ノベヤマさんは 嵐のような いびきを かいて、ねむりこんでしまいました。

(9) が、その とき、宇宙船には なぞの 通信が 送りこまれていたのです。
 「わたしは あなたの 船から 通信された 電波を 傍受した 者です。あな
 たが 送った 流れ星の 画像は、たしかに 鳥であります。しかし、それは
 地球上に いる 鳥では ない。この 鳥は 紀元前 二百年 前に、ギリシャ
 の 博物学者 ノラステルダマスの 本の 中に 登場する 霊鳥類 マカシ
 ギ科に 属する マカフシギと いう シギの 一種に ちがい ありません。」

(10) 「ノラステルダマスは、つぎのように 記しています。『マカフシギ、天よ
 り きたる とき、地上には おびたしい 異変が おきるであろう。しかし
 て この 鳥が さった のちに、人類は もっとも たいせつな 友人を う
 しなうのである。それは 人間が、地球を そまつに あつかった むくいであ
 ると 知れ。』」

メールの おわりには、マカフシギの 古い イラストの コピーも ついてい
 ました。



(7) The meteor shower was taking a long time to appear.
 Mr Nobeyama became incredibly sleepy.
 'Let me just lie down for a bit...'
 Mr Nobeyama was the only astronaut on the spaceship so he could not pass the
 job on to anybody else.
 He set the camera to automatic mode and lay down on the bed next to it.

(8) How comfortable the bed was! Astronauts must spend all their time operating
 countless machines, all day and night. It is very tiring work.
 Mr Nobeyama snored like a steam train as he sunk into a deep sleep.

(9) At that very moment, a mysterious message was being sent to the spaceship:
 'I am the one who intercepted the signal you sent to Earth. There certainly is a
 bird in the picture you took of the meteor. But that bird is not one which is found
 on Earth. That bird, which belongs to the family of the sacred birds is, without
 doubt, the Makafushigi. It is a kind of sandpiper which was written about by
 Greek naturalist Norasteldamas, 200 years before Christ.'

(10) 'Norasteldamas had the following to say about the bird:
 "When the Makafushigi comes down from Heaven, it will bring countless changes
 to Earth. And when the bird leaves Earth, humans will lose their most important
 friends. Understand that this is punishment for how badly humans have treated
 Earth."
 There was a copy of an ancient illustration of the Makafushigi at the end of the
 e-mail.



(11) そんな こととも しらず、ノベヤマさんは、^{おおぐち}大口を あけ、よだれを たらしながら、宇宙では ^{うちゅう}食べられない ^{どん}ウナ井と、^{すし}寿司と、おでんと、^{ちや}シャケ茶 づけの ゆめを ^み見ていました。

そして、その ころ、はるか ^{ちきゅう}地球では ノラステルダマスの ^{よげん}予言 どおり、
5 ^{しん}信じられない できごとが おきていたのです。

(12) ポーランドの かたいなかで ^{がっこう}学校の ^{きょうし}教師を している ジョゼフ・クラ ウスナーさんは、朝 ^{あさ}起きて、いつものように すいそうの ミドリガメに エサ を やろうと した とたん、こしを めかしました。

10 なんと ミドリガメの マリアに まゆげが はえていたのです。

あっけに とられていると、マリアの ^{くち}口もとからは ^みみるみる ふとい ひげ が のびてきて、

「しょくん！^た立ち上がれ。」

えんぜつを はじめたのです。

15

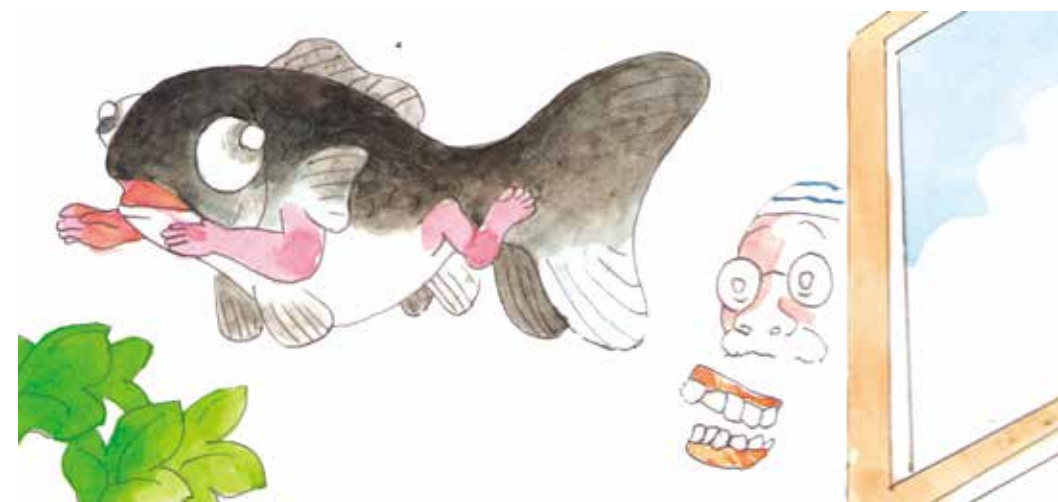
(13) つぎに、^{いへん}異変に ^き気づいたのは、スペインの マドリッドで ^{きんぎょ}金魚を そだ ている ^{としょかんいん}図書館員、フリオ・セルバンテスでした。

フリオさんは じまんの ^{でめきん}出目金に、いつもどおり、

「おはよう。」

20 ^{こえ}声を かけた とたん、^い入れ歯を おとしました。

まっくろな ^{でめきん}出目金から、いつの まにか ^{てあし}ピンクの 手足が はえて、すいそ うの ^{なか}中を ^{ひらおよ}平泳ぎしているのみ ならず、まもなく ^{くうちゅう}空中に ^{およ}泳ぎだすと、あけ はなした まどから、どこかへ ^と飛んでいってしまったのです。



(11) Mr Nobeyama, of course, knew nothing of this as he slept with his mouth wide open and drooling, dreaming of sushi, eel rice bowls, oden, salmon chazuke and all the other food he could not eat in space.

It was at this time that, on the far away Earth, unbelievable things began to happen just as Norasteldamas had said they would.
5

(12) In the Polish countryside, school teacher Joseph Klausner had just woken up and was going to feed his green turtle in its tank when he was suddenly frozen with shock.

His little green turtle, Maria, had grown eyebrows!

10 As the surprised Joseph watched, a thick beard began to grow around Maria's mouth who then started a speech:

'Comrades! Arise!'

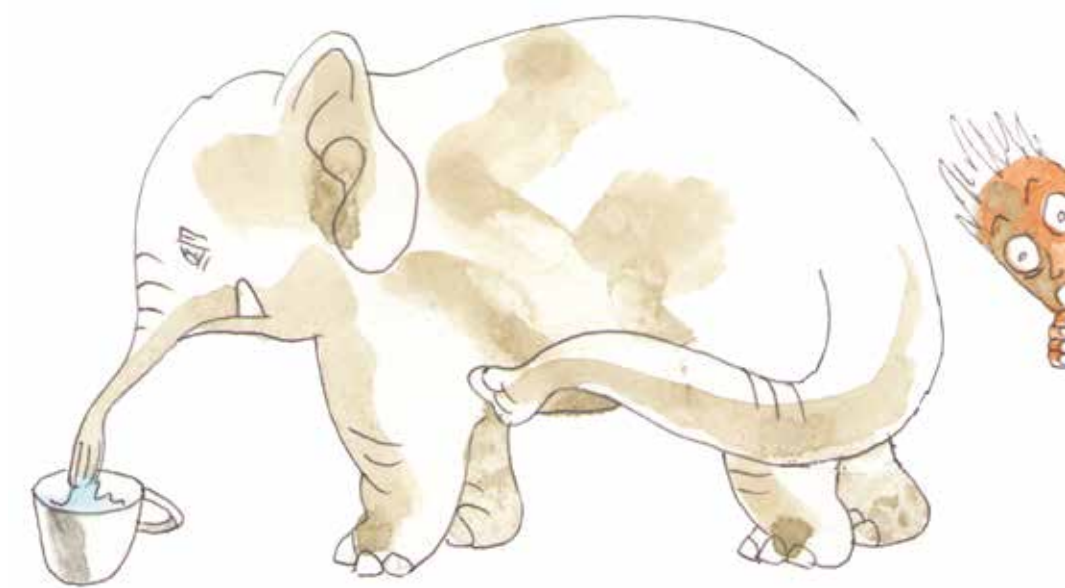
(13) The next person to notice a change was Julio Cervantes, a librarian and
15 goldfish owner in Madrid, Spain.

As he did every morning, Julio said

'Good morning!'

to his fancy telescope eye goldfish which he was very proud of. As soon as he said this, however, he dropped his dentures in surprise.

The black goldfish had grown pink arms and legs and was swimming
20 breaststroke in the tank. Not only that, it soon began swimming through the air and flew away through the open window.



(14) インドで 林業を^{りんぎょう} いとなんでいる シャンカールさんは、切りだした ヤシを はこぶ ゾウたちの ゾウ舎に^{しや} でかけて、

「やだ、信じられない！」

ヒンディー語で ひめいを あげました。

5 そこには、シッポと 鼻が^{はな} 入れちがっている ゾウたちが、「鼻」を ふりながら「シッポ」で 水を^{みず} のんでいたのです。

(15) 中国の^{ちゅうごく} 四川省に^{しせんしょう} ある 動物園の^{どうぶつえん} 飼育係、チュウさんは、パンダの^{しいうがかり} 世話をする^{せわ} 係でした。いつものように ササの^は 葉を かかえて 檻に^{おり} はい

10 ると、そこには いつもと ぜんぜん ちがう けものが いたのです。

とっさに どこが どう ちがうのか、チュウさんは わかりませんでした。が、しばらく たつと、パンダの^{しろくろ} 白黒もようが、ぎゃくに なっている ことに 気づいたのです。

15 (16) パンダだけでは ありません。ロシアの^{さんみやく} ウラル山脈で 動物調査官を^{どうぶつちようさかん} している、イワン・ウロンスキは その^ひ 日、見た^み ことも ない もうじゅうに おそいかかられました。

いのちからがら、木に^き よじのぼって、その^み けものを見ると、どうやら トラのようです。が、トラの^{くろ} しまもようも 黒と^{きいろ} 黄色が、ぎゃくの^{いろ} 色に なっ

20 ていたのです。



(14) Shankar, who worked in forestry in India, had just gone to the elephant pen where he kept elephants to help carry the palm trees he chopped down.

'Oh no! I can't believe it!'

He could be heard to yell in Hindi.

5 The elephants all had their noses and tails swapped around and were drinking from their *tails* while wagging their *noses*.

(15) At a zoo in Sichuan Province in China, Chen was the zoo keeper in charge of looking after the pandas. As he always did, he brought a bundle of bamboo leaves into the panda cage. What he saw there was not the animal he was used to seeing.

10 It took Chen some time to realise what was different. The black and white colours of the panda were the wrong way around.

(16) It was not just the pandas this had happened to. In the Ural Mountains in Russia, Ivan Wronski, an animal investigator, was attacked by an animal he had never seen before.

15 He barely escaped alive by climbing a tree. He looked down at the animal and saw it looked like a tiger. The tiger's black and orange stripes, however, had been switched around.

20



(17) トラと いえば、ライオンにも ^{へんか}変化が おきていました。

アフリカの ゴロンゴロ ^{どうぶつこうえん}動物公園では おなじ ころ、とつぜん みょうな ^{どうぶつ}動物が あらわれたのです。全身が ^{ぜんしん}毛むくじゃらなのです。

カモシカを おそうのですが、毛が ^け足に からまって ^{はし}走る ことも できま
5 せん。^{どうぶつがくしゃ}動物学者の ^しンガイ・ワキマリ氏が ^{しょうたい}しらべてみると ^{からだじゅう}正体は、体中が た
てがみだらけに なった ライオンでした。

(18) ^{なんべい}南米の ^{がわ}ブラジル—アマゾン川では こんなふうでした。

^{りょうし}漁師の ペドロ・ロペスが いつものように ^{ふね}舟を ^だ出すと、いつもは ^{わに}ワニの
10 たまり場^ばに なっている ^{いりえ}入江に、ワニが ^{いっとう}一頭も ^み見あたりません。

ふしぎに ^{おも}思っ^きて あたりを さがすと、なんと ^{うた}いう ことか、ワニたちが
いっせいに、木に ^{よじ}よじのぼって、歌を うたっていたのです。

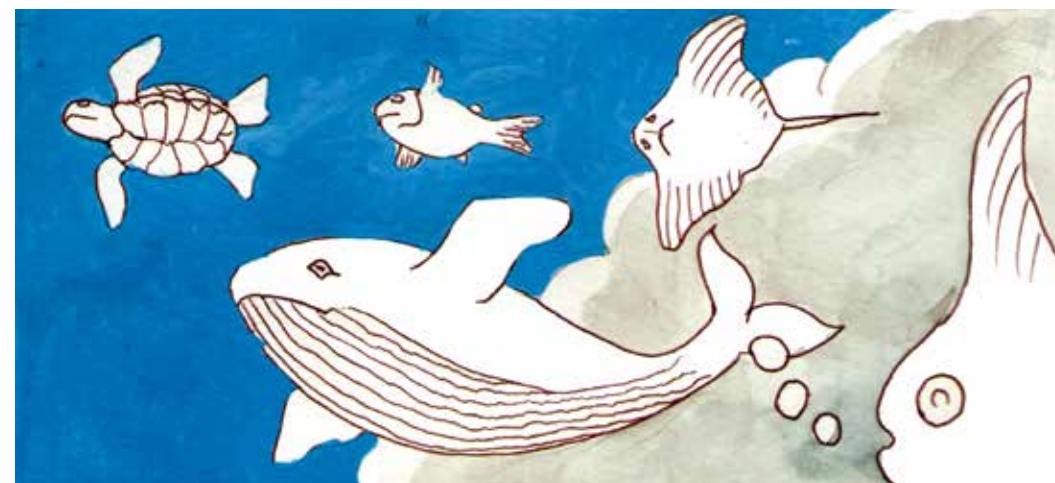
(19) ^{にほん}日本の ^{とうきょうわん}東京湾では、^{うみ}海の ^{おせん}汚染を ^{せんすいふ}しらべていた ^{たなか}潜水夫の 田中
15 光太郎^{こうたろう}が、^{しん}信じられない ^{こうけい}光景に ^で出くわしました。

ふかぶかと つもった ^{なか}ヘドロの ^{かい}中から、つぎつぎと ^{かい}貝たちが ^だとび出して
きたのです。アサリ、ハマグリ、カラス貝 … ^{かい}貝たちは ^{かい}てんでに ^{かい}からを は
ばたいては、どろを まいあげて ^{うみ}海の ^{うへ}上へ ^と飛びさっていくのです。そのよう
すは、まるで ^みチョウチョウのように 見えました。

20 (20) その ^{うみ}ころ ^で海に ^{せかい}出ていた ^{ひと}世界じゅうの ^{いき}人たちが ^{いき}息を ^いのんでおり
ました。

ウミガメが、マンボウが、サメが、クジラが、マンタが、トドや アザラシが、
つまりは、^{うみ}海の ^{なか}中で ^{くら}らしている ^いあらゆる ^{いき}いきものたちが、^はヒレを ^ははば
25 ^{そら}たいて、空に ^だまい出し ^ははじめたのです。

いちばん いばっていたのは、ちっぽけな トビウオでしたけれど。



(17) Speaking of tigers, the lions were undergoing changes, too.

At around the same time at the Ngorongoro Zoological Park in Africa, a strange animal suddenly appeared. It was completely covered in thick hair.

5 It tried to hunt deer, but its legs got trapped in its own hair and it could not run. Ngai Wakimari, the zoologist, investigated the animal and discovered that it was a lion whose mane had spread all over its body.

10 (18) Something odd was happening on the Amazon River in Brazil in South America, too.

Pedro Lopes, a fisherman, was setting out on his boat as he always did. He noticed that the alligators which usually gathered in the cove were all gone today.

15 He found this strange and looked around. That was when he noticed that the alligators had all climbed trees and were singing songs together.

(19) In Tokyo Bay in Japan, Kotaro Tanaka, who was investigating sea pollution, came across the following unbelievable sight.

20 One after another, shellfish started to jump free from the thick sludge at the bottom of the bay. Oysters, clams, mussels... all the different shellfish flapped their shells in their own ways, breaking free of the sludge and gliding up through the sea.

25 They looked just like butterflies.

(20) People out on the sea all around the world gasped in amazement.

30 Sea turtles, ocean sunfish, sharks, whales, manta rays, sea lions, seals... all of the animals living in the sea starting flapping their fins and flying up into the sky.

It was the little flying fish, though, who was the biggest showoff.



(21) いっぽう、アメリカの アリゾナ砂漠では、とりわけ すごい 事が おきていました。
恐竜の 骨を 発掘していた 古生物学者、ジョン・カーペンターは、砂の
あちこちから むくむくと 起き出した 骨が、あっというまに より集まって
5 恐竜に なっていくのを見て、気を うしなってしまった ものです。

(22) 「はっ…いけない！」
ノベヤマさんは、ゆめの なか で シャケ茶づけを たべおわった とたん、目を
さしました。
10 あわてて 宇宙船の 外に 目を やります。
その とき、ノベヤマさんは 信じられない けしきを 目のあたりに したの
です。

(23) 目も くらむ ような 流星雨です。
15 それも 宇宙から 地球に 降るのでは なく、流れ星が、地球から 天空に
むかって つぎつぎに 飛びさっているでは ありませんか。
まだ、なぞの 通信に 目を とおしていない ノベヤマさんは、その 流星が
「地球を すてていく」「人間の 一番 たいせつな 友人」たちの すがただとは、
おも 思っても いませんでした。
20 流れ星は、人間いがいの すべての いきものたちに ほかなりませんでした。

(24) やがて 流星雨が おさまると、地球は くすんだ なまり色に かわりま
した。
すると、つぎに、地球に くねくねと 足が はえはじめます。
25 見るまに 地球は 一世界地図 もようの— タコに 変身すると、ピューッと ス
ミを はいて、宇宙の かなたへ 飛んで いってしまったのです。
ノベヤマさんは、あわてて タコの あとを 追いかけてました。
「気づいた ときには おそすぎる。ノラステルダマス。」
通信には そんな ひとことが、書きたしてありました。

(おわり)



(21) Something particularly amazing was happening in the Arizona Desert in the United States of America.

John Carpenter was an archaeologist who was digging for dinosaur bones. He fainted in shock when he saw bones stir from the sand all around him and quickly
5 come together to form a dinosaur.

(22) 'Oh dear!'

Mr Nobeyama finished eating his salmon chazuke in his dream and immediately woke up.

10 He hurried to look out of the spaceship window.
That was when he saw an unbelievable sight.

(23) It was a dizzyingly impressive meteor shower.

And it looked to be heading out from Earth into space, rather than towards Earth.

15 Still not having read the mysterious message, Mr Nobeyama had no idea that this meteor shower was 'man's most important friends' abandoning Earth.
The meteors were, in fact, all the animals of Earth besides the humans.

(24) After the meteor shower passed, Earth became a dull, grey colour.

20 Next, twisty legs began to grow from Earth.

As Mr Nobeyama watched, Earth transformed into a giant octopus (patterned like a world map!) and shot off into space with a great blast of ink.

Mr Nobeyama hurried to chase after the octopus.

A new line had been added to the previous message:

25 'By the time you have realised, it is too late. Norasteldamas.'

(The End)

Translated by Ash SPREADBURY

7 注文の多い料理店

The Restaurant of Many Orders

みやざわ けんじ 作
宮沢 賢治 作

Author : Kenji MIYAZAWA

ささき ひろこ 絵
佐々木 ひろこ 絵

Illustrator : Hiroko SASAKI



(1) 二人の若い紳士が、すっかり イギリスの兵隊のかたちをして、
ぴかぴかする鉄砲を かついで、白熊のような犬を二匹 つれて、だいぶ
山奥の、木の葉の かさかさした ところを、こんな ことを 言いながら、あるい
ておりました。

5 「ぜんたい、ここらの山は けしからんね。鳥も 獣も 一匹も いやがらん。
なんでも かまわないから、早く タンタアーンと やってみたいもんだなあ。」
「鹿の 黄色な 横っ腹なんぞに、二、三発 お見舞い もうしたら、ずいぶん
痛快だろうねえ。くるくる まわって、それから どたと 倒れるだろうねえ。」
それは だいぶの 山奥でした。案内してきた 専門の 鉄砲打ちも、ちょっと
10 まごついて、どこかへ 行ってしまったくらい 山奥でした。

(2) それに、あんまり 山が ものすごいので、その 白熊のような犬が、二
匹 いっしょに めまいを 起こして、しばらく うなって、それから あわを
はいて 死んでしまいました。

15 「じつに ぼくは、二千四百円の 損害だ。」と、一人の 紳士が、その 犬の
眼ぶたを、ちょっと かえしてみても 言いました。

「ぼくは 二千八百円の 損害だ。」と、もう 一人が、くやしそうに、頭を
まげて 言いました。

はじめの 紳士は、すこし 顔いろを 悪くして、じっと、もう ひとりの 紳
20 士の、顔つきを 見ながら 言いました。

「ぼくは もう もどろうかと おもう。」

「さあ、ぼくも ちょうど 寒くは なったし 腹も すいてきたし もどろう
と おもう。」

「それじゃ、これで 切りあげよう。なあに もどりに、昨日の 宿屋で、山鳥
25 を 十円も 買って 帰れば いい。」

「兎も でていたねえ。そう すれば 結局 おんなじ ことだ。では 帰ろう
じゃ ないか。」

(1) Two young gentlemen were deep in the mountains, walking among the dry
leaves. They were dressed just like British soldiers and carried shiny rifles. They
had two white dogs with them which looked like polar bears. Their conversation
went like this:

5 'What's wrong with these mountains? We've not seen a single bird or animal.
I don't care what, I just want to shoot something. Give it a good bang, bang!'

'How good it would feel to stick a couple of bullets into the yellow belly of a deer
right now. Watch it spin around a bit before falling down.'

10 They were really rather deep in the mountains. So deep that their hunter guide
had lost his way and wandered off somewhere.

(2) The mountains were so frightful that the two polar bear-like dogs both became
dizzy, whined, and eventually dropped dead, foaming at the mouth.

15 'Well, that's 2,400 yen wasted,' said one of the gentlemen, peeling back his dog's
eyelids a little.

'2,800 yen for me,' complained his companion, tilting his head with regret.

The first gentleman became somewhat pale and watched the other's face
carefully as he said,

20 'I think I want to head back.'

'Well then, I think I shall join you. It has started to get cold and I'm hungry.'

'Let's call it quits here, then. On the way back, we can call at the inn where we
stayed from yesterday and buy ten yen worth of pheasants to take home.'

25 'I remember they had hares, too. We can buy both and it will be as if we had
caught them ourselves. Right, let's head back.'



(3) ところが どうも 困った ことは、どっちへ 行けば もどれるのか、いっ
こうに 見当が つかなくなっていました。

風が どうと 吹いてきて、草は ざわざわ、木の葉は かさかさ、木は ごと
んごとんと 鳴りました。

5 「どうも 腹が すいた。さっきから 横っ腹が 痛くて たまらないんだ。」

「ぼくも そうだ。もう あんまり 歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。」

「ああ 困ったなあ。何か たべたいなあ。」

「食べたいもんだなあ。」

10 二人の 紳士は、ざわざわ 鳴る すすきの 中で、こんな ことを 言いまし
た。

(4) その 時 ふと うしろを 見ますと、立派な 一軒の 西洋造りの 家が
ありました。そして その 玄関には、

15



と いう 札が でていました。

20 「君、ちょうど いい。ここは これで なかなか 開けているんだ。入ろうじゃ
ないか。」

「おや、こんな ところに おかしいね。しかし とにかく 何か 食事が で
きるんだろう。」

「もちろん できるさ。看板に そう 書いて あるじゃ ないか。」

25 「入ろうじゃ ないか。ぼくは もう 何か 食べたくて 倒れそうなんだ。」



(3) The problem was, however, that the pair had completely lost track of what
direction home was.

The wind blew, making the grass murmur, the leaves rustle and the trees moan.

'I'm terribly hungry. I've had a pain in my side for some time.'

5 'Me too. I don't want to walk much further.'

'Me neither.'

'What a situation! I really want something to eat.'

'Me too. I just want something to eat.'

This was how the conversation went as the two gentlemen walked through the
rustling zebra grass.

10

(4) It was at that moment that the two men happened to glance behind them and
noticed a single, grand, Western-style building. The sign at the entrance read as
follows:

15



'Perfect! This is just what we were looking for. Let's go in.'

20 'Wait a second. Isn't it a little strange to find a restaurant here? Still, I guess they
will have something for us to eat.'

'Of course! That's what it says on the sign, isn't it?'

'Let's go in, then. I'm going to collapse if I don't eat something soon.'

25



ふたり 二人は げんかん 玄関に た 立ちました。げんかん 白い 瀬戸の レンガで 組んで、実に 立派な もんです。
そして ガラスの 開き戸が たって、そこに きんもじ 金文字で こう 書いて ありました。

5 《どなたも どうか お入りください。けっして ご遠慮は ありません。》

ふたり 二人は そこで、ひどく よろこんで い 言いました。
「こいつは どうだ、やっぱり 世の 中は うまく できているねえ。今日の 一日 なんぎしたけど、こんどは こんな いい ことも ある。この うち は 料理店だけれども ただで ごちそうするんだぜ。」
「どうも そうらしい。けっして ご遠慮は ありませんと いうのは その 意味だ。」
ふたり 二人は 戸を お 押して、なか はり 中へ 入りました。そこは すぐ ろうか 廊下 に なってい ました。その ガラス戸の うらがわ 裏側には、きんもじ 金文字で こう なっていました。

《ことに 肥った お方や 若い お方は、大歓迎いたします。》

(5) ふたり 二人は だいかんげい 大歓迎と いうので、もう おお 大よろこびです。
20 「君、ぼくらは 大歓迎に あたっているのだ。」
「ぼくらは 両方 兼ねているから。」
ずんずん ろうか 廊下を すす い 進んで行きますと、こんどは みず 水いろの ペンキぬりの 扉 が ありました。
「どうも 変な 家だ。どうして こんなに たくさん 戸が あるのだろう。」
25 「これは ロシア式だ。寒い とこや 山の 中は みんな こうさ。」
そして ふたり 二人は その 扉を あけようと しますと、上に 黄いろな 字で こう 書いてありました。

《当軒は 注文の 多い 料理店ですから、どうか そこは ご承知ください。》



The two stood in the entranceway. It was made of white bricks from Seto and was really rather impressive.

There was a message written in golden letters on the glass door which said:

5 <<Please do come in. We are most happy to serve all guests.>>

The two companions were overjoyed.

‘Wow! What a wonderful world we live in! We had some trouble earlier today, but look at how lucky we are now. It looks like this restaurant is going to give us a free meal.’

‘You’re right. That must be what this message means.’

They pushed the door open and went inside. The door led on to a long corridor. On the other side of the door was another golden message:

15 <<We particularly welcome plump and young guests.>>

(5) The pair were over the moon as they were to be particularly welcomed.

‘Looks like it’s a special welcome for us!’

20 ‘Indeed! We fit both conditions!’

Moving quickly down the corridor, the two next came to a door painted blue.

‘What a strange building. I wonder why there are so many doors.’

‘This is Russian style architecture. You find lots of building like this in cold places and in the mountains.’

25 They went to open the door and noticed another golden message above it:

<<This is a restaurant with many orders. We thank you for your understanding.>>

30



「なかなか はやっているんだ。こんな ^{やま} 山の ^{なか} 中で。」
 「それあ そうだ。見たまえ、東京の ^み 大きな ^{とうきよう} 料理屋だって ^{おお} 大通りには ^{おおどお} す
 くないだろう。」
 二人は ^{ふたり} 言いながら、その ^い 扉を ^と あけました。すると ^{うらがわ} その 裏側に、

5 ^{ちゅうもん} 《注文は ^{ずいぶん} 多いでしょうが ^{おお} どうか ^{いちいち} こらえてください。》

「これは ぜんたい どう ^{ひとり} いうんだ。」一人の ^{しんし} 紳士は ^{かお} 顔を ^{しかめ} しました。
 「うん、これは ^{ちゅうもん} きっと 注文が ^{おほ} あまり ^{おほ} 多くて ^{したく} 支度が ^{てまど} 手間取るけれども
 10 ごめん くださいと、こう ^{はや} いう ^{へや} ことだ。」
 「そうだろう。早く ^{なか} どこか 部屋の ^{すわ} 中に ^{なり} 入りたいもんだな。」
 「そして テーブルに ^{すわ} 座りたいもんだな。」

(6) ^と ところが ^{ひと} どうも ^{うるさい} うるさい ^{こと} ことは、また ^{ひと} 扉が ^{一つ} ありました。そ
 15 して ^{その} その ^{わきに} わきに ^{かがみ} 鏡が ^{かか} かって、その ^{した} 下には ^{なが} 長い ^え 柄の ^つ ついた ^{ブラ} ブラ
 シが ^お 置いてあったのです。
 扉には ^{あか} 赤い ^じ 字で、

20 ^{きやく} 《お客さまがた、ここで ^{かみ} 髪を ^{きちん} として、
 それから ^{はきもの} はきものの ^{どろ} どろを ^お 落としてください。》

と ^か 書いてありました。
 「これは ^{どうも} どうも ^{もっとも} もっともだ。僕も ^{ぼく} さっき ^{げんかん} 玄関で、山の ^{やま} 中だと ^{なか} 思って
 25 ^み 見くびったんだよ。」
 「作法の ^{さほう} きびしい ^{うち} 家だ。きっと ^{よほど} よほど ^{えらい} えらい ^{ひと} 人たちが、たびたび ^く 来
 るんだ。」
 そこで ^{ふたり} 二人は、きれいに ^{かみ} 髪を ^{けず} けて、くつの ^{どろ} どろを ^お 落としました。



'I didn't think that this place would be so popular, being so deep in the mountains.'
 'Don't be silly. All the best restaurants in Tokyo are found off the main roads, right?'

The pair opened the door as they spoke and found another message on the other
 5 side:

<<We really do have many orders. Please be patient with each one.>>

10 One of the gentlemen grimaced. 'What do you think this means?'
 'They must be telling us to be patient because they get a lot of orders and they
 spend a lot of time preparing each one.'
 'You must be right. I hope we get to one of the rooms soon.'
 'Indeed. I want to sit down at a table.'

15 (6) To their dismay, the two men came across yet another door. Next to it was a
 mirror, and below that a brush with a long handle.
 On the door was written in red letters:

20 <<Dear guests. Please fix your hair and remove any mud from your shoes.>>

'Well, I can't argue with that. I didn't think this would be such a fancy place, what
 with it being so deep in the mountains.'
 25 'They really care about manners here. They must get a lot of very important
 customers.'
 The two made their hair neat and brushed the mud from their boots.



そしたら、どうです。ブラシを 板の 上に おくや いなや、そいつが ぼうつ
と かすんで なくなって、風が どうと 部屋の中 に入ってきました。
二人は びっくりして、たがいに よりそって、扉を がたと 開けて、次
の 部屋へ 入って 行きました。早く 何か 暖かい ものでも 食べて、元気
5 を つけておかないと、もう 途方も ない ことに なってしまうと、二人とも
おも 思ったのです。

(7) 扉の 内側に、また 変な ことが 書いてありました。

10 <<鉄砲と 弾丸を ここへ 置いてください。>>

みると すぐ 横に 黒い 台が ありました。
「なるほど、鉄砲を 持って ものを 食うと いう 法は ない。」
「いや、よほど えらい ひとが しじゅう 来ているんだ。」
15 二人は 鉄砲を はずし、帯皮を 解いて、それを 台の 上に おきました。

(8) また 黒い 扉が あきました。

20 <<どうか ぼうしと がいとうと くつを おとりください。>>

「どうだ、とるか。」
「仕方が ない、とろう。たしかに よっぽど えらい 人なんだ。奥に 来て
いるのは。」
二人は ぼうしと オーバーコートを くぎに かけ、くつを めいで ペタペ
25 た 歩いて 扉の中 に入りました。



And what should happen next! When they returned the brush to its shelf it faded away into nothingness and a gust of wind blew into the room.

The pair huddled together in surprise. They opened the door and moved quickly through. The two felt that they could not go on much longer without a warm meal to raise their spirits.

(7) They found another odd message on the other side of the door:

<<Please leave your rifles and bullets here.>>

10 They noticed a black table next to the door.
'Of course. It's bad manners to eat while carrying a gun.'
'Wow. They really must get a lot of important customers.'
The two men placed their rifles and belts on the table.

(8) There was another door, this time black.

<<We ask that you please remove your hats, coats and boots.>>

'What do we do?'
'I guess we have to. There must be some very important guests inside.'
20 The two hung their hats and overcoats on the hooks, took off their boots, and
pattered through the door.

(9) 扉の裏側には、

《ネクタイピン、カフスボタン、めがね、さいふ、その他金物類、
ことに とがった ものは、みんな ここに 置いてください。》

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、口を開けて置いてありました。かぎまでそえてあったのです。
「ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。金気のものあぶない。ことに とがった ものは あぶないと こう 言うんだろう。」
「そうだろう。してみると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」
「どうも そうらしい。」
「そうだ。きっと。」
二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫の中に入れて、ぱちんと錠を掛けました。

(10) すこし行きますとまた扉があつて、その前にガラスのつぼが一つありました。扉にはこう書いてありました。

《つぼの中のクリームを顔や手足にすっきりぬってください。》

みるとたしかにつぼの中のもは牛乳のクリームでした。
「クリームをぬれと いうのは どう いうんだ。」
「これはね、外がひじょうに寒いだろう。部屋の 中が あんまり 暖かいと ひびが 切れるから、その 予防なんだ。どうも 奥には、よほど えらい人が 来ている。こんな ことで、案外 ぼくらは、貴族と 近づき なるかも 知れないよ。」
二人は つぼの クリームを、顔に ぬって 手に ぬって、それから くつ下を ぬいで 足に ぬりました。それでも まだ 残っていましたから、それは二人とも めいめい こっそり 顔へ ぬる ふりを しながら 食べました。

(11) それから 大急ぎで 扉を開けますと、その裏側には、

《クリームを よく ぬりましたか。耳にも よく ぬりましたか。》

と書いてあつて、ちいさな クリームの つぼが ここにも 置いてありました。
「そう そう、ぼくは 耳には ぬらなかつた。あぶなく 耳に ひびを 切らす ところだつた。ここの 主人は じつに 用意周到だね。」

(9) This one had a message on the back, too:

<<Please remove any tie pins, cuff links, glasses, wallets and other metal items. Please make sure to remove any pointy objects in particular.>>

Next to the door was a spectacular safe, painted black, with its door already open. There was even a key for it.
‘A-ha! They must use electricity to cook things here. That’s why they say metal objects, particularly pointy ones, are dangerous.’
‘That must be it. I guess the bill is paid here on the way out.’
‘It looks like it.’
‘It must be.’
The two took off their glasses and cuff links, placed any metal items in the safe, and locked the safe door with a click.

(10) They walked a little further and came across another door. In front of the door was a single glass pot. The message on the door read:

<<Please use this cream thoroughly on your face, hands and feet.>>

Looking inside the jar, they discovered that it was a milk cream.
‘Why do they need us to use this cream?’
‘It must be because it’s so cold outside. Going from that to a warm room could give you cracked skin. This cream is to stop that. There must be truly important customers here. Who would have thought we could meet the aristocracy up here in the mountains!’
The two put the cream on their faces and hands, then took off their socks and put the cream on their feet. There was still some cream left after that, so they each pretended to put it on their faces while eating it instead.

(11) They quickly opened the door, only to see another small pot of cream and a message on the back of the door reading:

<<Did you make sure to get the cream everywhere? Even on your ears?>>

‘They’re right, you know. I did forget to put it on my ears. I would have gotten cracked skin on my ears if they didn’t remind us. The owner here really thinks of everything!’



「ああ、細かい ところで よく 気が つくよ。ところで ぼくは 早く 何か 食べたいんだが、どうも こう どこまでも 廊下じゃ 仕方が ないね。」
すると すぐ その 前に 次の 戸が ありました。

5 <<料理は もうすぐ できます。
十五分と お待たせは いたしません。
すぐ 食べられます。
早く あなたの 頭に ビンの 中の 香水を よく 振りかけてください。>>

10 そして 戸の 前には 金ピカの 香水の ビンが お 置いてありました。
二人は その 香水を、頭へ ぱちゃぱちゃ 振りかけました。ところが、その
香水は、どうも 酢のような 匂いが するのです。
「この 香水は へんに 酢 くさい。どうしてなんだろう。」
「まちがえたんだ。下女が 風邪でも 引いて まちがえて 入れたんだ。」
15 二人は 扉を あけて 中に 入りました。

(12) 扉の 裏側には、大きな 字で こう 書いて ありました。

20 <<いろいろ 注文が 多くて うるさかったでしょう。お気の毒でした。
もう これだけです。どうか からだ中に、つぼの 中の 塩を たくさん
よく もみこんでください。>>

なるほど 立派な 青い 瀬戸の 塩つぼは お 置いて ありましたが、こんどと
いう こんどは 二人とも ぎょっと して おたがいに クリームを たくさん
25 ぬった 顔を 見合わせました。



‘They really do pay great attention to detail. I just want to hurry up and eat, though. This corridor seems to go on forever.’
In front of them they saw yet another door.

5 <<The meal is nearly ready.
It will not take more than 15 minutes now.
It will not be long until it is time to eat.
Please quickly splash the cologne from this bottle on your heads. >>

10 There was a shiny, golden bottle of cologne in front of the door.
The two men splashed it on their heads. Curiously, it smelled a lot like vinegar.
‘This cologne smells strangely like vinegar. Isn’t that odd?’
‘They must have made a mistake. Perhaps the kitchen maid has a cold and isn’t
15 thinking straight.’
They opened the door and stepped through.

(12) On the other side of the door, in big letters, was written:

20 <<We are sorry there were so many orders. We do feel sorry for you.
This is the last one. Please rub the salt from this pot thoroughly into your
bodies. >>

25 There was a magnificent blue Seto salt pot made of fine china. This time the two
were startled and turned their cream-covered faces to look at each other.

「どうも おかしいぜ。」
「ぼくも おかしいと 思う。」
「たくさんの 注文と いうのは、向こうが こっちへ 注文してるんだよ。」
「だからさ、西洋料理店と いうのは、ぼくの 考える ところでは、西洋料理を、
5 来た 人に 食べさせるのでは なくて、来た 人を 西洋料理に して、食べ
てやる 家と いう ことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、
ぼくらが・・・。」がたがた がたがた、ふるえだして もう ものが 言えま
せんでした。

「その、ぼ、ぼ、ぼくらが・・・うわあ。」がたがた がたがた ふるえだして、
10 ものが 言えませんでした。
「逃げ・・・。」がたがた しながら 一人の 紳士は うしろの 戸を お
と しましたが、どうです。戸は もう 一分も 動きませんでした。

(13) 奥の 方には まだ 一枚 扉が あって、大きな かぎ穴が 二つ つき、
15 銀いろの ホークと ナイフの 形が 切りだしてあって、

「いや、わざわざ ご苦労です。
たいへん 結構に できました。
さあさあ おなかに お入りください。≫

20 と 書いて ありました。おまけに かぎ穴からは きよろきよろ 二つの 青い
めだま 眼玉が こっちを のぞいています。

「うわあ。」がたがた がたがた。

「うわあ。」がたがた がたがた。

25 二人は 泣き出しました。

(14) すると 戸の 中では、こそこそ こんな ことを 言っています。

「だめだよ。もう 気が ついたよ。塩を もみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の 書きようが まずいんだ。あすこへ、いろいろ 注文
30 が 多くて うるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けた ことを
書いたもんだ。」

「どっちでも いいよ。どうせ ぼくらには、骨も 分けてくれや しないんだ。」

「それは そうだ。けれども もし ここへ あいつらが 入って 来なかった
ら、それは ぼくらの 責任だぜ。」

35 「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早く いらっしゃい。いらっしゃい。いらっ
しゃい。お皿も 洗ってありますし、菜っ葉も もう よく 塩で もんでおき
ました。あとは あなたがたと、菜っ葉を うまく とりあわせて、まっ白な
お皿に のせるだけです。早く いらっしゃい。」

‘There’s something strange going on here.’

‘I agree.’

‘When they said this restaurant has many orders, I think they meant orders for us!’

5 ‘I reckon the “Western cuisine” isn’t what they serve to the people who come
here. It’s what they turn them into! S-so that means w-w-we...’ He started shaking
and his teeth started chattering and he could say no more.

‘Y-you... you mean that w-w-we...’ His companion started shaking and could speak
no more either.

10 ‘R-r-r... run!’ one of the gentlemen managed to say, and tried to open the door
behind them. But it did not budge an inch.

(13) Further into the room was another door with two large keyholes and a silver
15 knife and fork carved into it. The message written on it said:

<<Well, we do thank you for your cooperation.

The food is looking ready to eat.

20 Come on now, do come in. >>

To top it all off, two big, blue eyes were peeping through the keyholes at them.

‘Waaah!’ screamed one man, trembling.

25 ‘Nooo!’ His companion trembled just as hard, and the two of them broke down in
tears.

(14) From the other side of the door a whispered conversation could be heard.

30 ‘This isn’t good. They’ve figured it out. They’re not rubbing the salt on
themselves.’

‘Of course they’re not. Look what the boss wrote. “We are sorry there were so
many orders. We do feel sorry for you.” That just gives the game away.’

‘Who cares. It’s not as if the boss would give us even the scraps, anyway.’

35 ‘No, but if we can’t get them to come in here then we’re the ones who will be
blamed.’

‘Let’s try calling them. Dear customers! Quickly now! Come in, come in! The
plates are washed and the salad is salted and ready. All that’s left is to arrange
40 you and the salad nicely on the lovely white plates! Do hurry up and come in!’



- 「へい、いらっしゃい、いらっしゃい。それとも サラダは お嫌いですか。そんなら これから 火を おこして フライに してあげましょうか。とにかく 早く いらっしゃい。」
- 二人は あんまり 心を 痛めた ために、顔が まるで くしゃくしゃの 紙
- 5 くずのように なり、おたがいに その 顔を見合わせ、ぶるぶる ふるえ、声も なく 泣きました。
- 中では ふっふっと わらって まだ さげんでいます。
- 「いらっしゃい、いらっしゃい。そんなに 泣いては せっかくの クリームが 流れるじゃ ありませんか。へい、ただいま。じきに もってまいります。さあ、早く いらっしゃい。」
- 10 「早く いらっしゃい。親方が もう ナプキンを かけて、ナイフを もって、舌なめずりして、お客さま方を 待っています。」
- 二人は 泣いて 泣いて 泣いて 泣いて 泣きました。
- 15 (15) その とき うしろから いきなり、
- 「わん、わん、ぐわあ。」と いう 声が して、あの 白熊のような 犬が 二匹、扉を つきやぶって 部屋の 中に 飛びこんできました。鍵穴の 眼玉は たちまち なくなり、犬どもは ううと うなって しばらく 部屋の 中を くるくる 廻っていましたが、また 一声、
- 20 「わん」と 高く ほえて、いきなり 次の 戸に 飛びつきました。扉は がたりと ひらき、犬どもは 吸いこまれるように 飛んで 行きました。
- その 扉の 向こうの まっくらやみの 中で、
- 「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」と いう 声が して、それから がさがさ 鳴りました。



- ‘Come on! Come in! Or perhaps you don’t like salads? In that case, shall we get a fire going and make something fried? Quickly now! Do come in!’
- The two men were in such distress that their faces crumpled like paper and all they could do was stare at each other, shaking and crying wordlessly.
- 5 Voices from the other side of the door laughed and continued shouting to them.
- ‘Come in, come in! If you keep crying like that, the cream will run off! Yes, sir. We will bring them through right away, sir. Come on, dear customers! Quickly now!’
- ‘Please come in quick! The boss has his napkin around his neck, his knife and fork in hand, and is licking his lips waiting for you!’
- 10 The two men cried and cried and cried some more.
- (15) At that moment, the two polar bear-like dogs suddenly burst through the door behind them into the room with a ‘Woof, woof, grrrr!’ The eyes at the keyhole quickly disappeared as the dogs walked around the room for some time, snarling.
- 15 Then, the two dogs gave a high-pitched ‘Woof!’ as they suddenly jumped together at the next door. It opened with a thud and the two dogs went jumping into the room as if sucked in.
- From the darkness beyond the door the sounds of a scuffle could be heard along with *meows*, *woofs* and *grrrs*.

20



(16) 部屋は けむりのように 消え、二人は 寒さに ぶるぶる ふるえて、草の 中に 立っていました。

みると、上着や くつや さいふや ネクタイピンは、あっちの 枝に ぶらさがったり、こっちの 根もとに ちらばったり しています。風が どうと 吹いてきて、草は ざわざわ、木の葉は かさかさ、木は ごとんごとんと 鳴りました。
犬が ふうと うなって もどってきました。

そして うしろからは、

「旦那あ、旦那あ。」と さけぶ ものが あります。

二人は にわかに 元気が ついて、

10 「おい、おい、ここだぞ、早く 来い。」と さけびました。

蓑帽子を かぶった 専門の 猟師が、草を ざわざわ 分けて やって来ました。

そこで 二人は やっと 安心しました。

そして 猟師の もってきた 団子を 食べ、途中で 十円だけ 山鳥を 買った。

15 て 東京に 帰りました。

(17) しかし、さっき 一ぺん 紙くずのように なった 二人の 顔だけは、東京に 帰っても、お湯に 入っても、もう もとの とおりに なりませんでした。



(16) The room disappeared like smoke and the two men were left standing in the grass, shivering with the cold.

They looked around and noticed their overcoats, boots, wallets, tie pins and other possessions hung on the tree branches and scattered among the tree roots. The wind blew, making the grass murmur, the leaves rustle and the trees moan.

The growling dogs came back to them.

And then, from behind them, came the shout of a familiar voice.

‘Gentlemen! Gentlemen!’

The two men, suddenly feeling much better, shouted back.

‘Hey! Over here! Come quickly!’

10 The hunter in his straw hat came wading through the grass towards them.

That was when they finally felt that they were safe.

They ate the sweet rice cakes which the hunter had brought them and headed back to Tokyo, stopping on the way only to buy ten yen worth of pheasants.

15 (17) However, even after returning to Tokyo and taking a hot bath, their crumpled paper faces would not go back to how they had been.

Translated by Ash SPREADBURY

この絵本はクラウドファンディングサイト READYFOR を通した支援で制作されました。
ご支援をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

(支援者)

厚味 勉 阿部 年晴 新井 明男 荒垣 英子 伊藤 恭子
稲垣 徹 井上 逸兵 大角 翠 小河原 正己 小幡 喬士
小幡 利江 小幡 由紀子 各務 孝 小西 あくあ 小林 昭美
小林 紀子 齋藤 きみゐ 斎藤 陽一 桜井 元雄 佐々木 ひろこ
佐藤 修 佐野 彩 佐野 純三 新郷 笙子 鈴木 健次
関口 瓊子 関谷 則 塚田 靖 戸山の仲間 中村 カオリ
原田 邦子 堀 紀子 牧 嶋 雅楽子 牧の会 武藤 敬子
森田 裕介 山下 里香 吉村 創
他匿名 20 名 (敬称略)

(物語)

芥川 龍之介 相馬 泰三 新美 南吉 舟崎 克彦 三間 由紀子
宮沢 賢治

(挿画)

えだ いずみ 佐々木 ひろこ 武 美和 てりい ゆかどうか 武智 祐治
舟崎 克彦 吉田 圭一郎

(英語翻訳)

Ash SPREADBURY Matthew TERKEL

(朗読)

Peter RILEY Eda STERNER KANEKO 高橋 正彦 森 秋子

(編集)

新井 明男 小林 昭美 佐野 彩 柴田 賢

(デザイン)

小林 秀夫 林 每里花 渡邊 シゲル

(録音協力)

(財) NHK インターナショナル MA スタジオ

(企画・制作)

NPO 法人 地球ことば村・世界言語博物館 The Archives of The World Languages
ホームページ <http://www.chikyukotobamura.org>
メール問合せ先 info@chikyukotobamura.org

2017 年 1 月 発行
2020 年 9 月 PDF eBook形式 電子書籍版 発行



NAME